WASON
HQ
1104
J74+

Nov. 1899
no. 499

明治三十二年十一月十日

女學雜誌

第四百九拾九號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百九十九號目次

◎社說
秋氣靜感
物價騰貴の大勢

◎家庭
花役者の家庭
怒り易き人に告ぐ（青柳有美）
巨燵弁慶の男子に告ぐ
怒り易きは虛僞多きなり
家風さ育ち（紫琴女）
肺病は不治の症に非ず（無識生）
書齋庭訓（山下石翁）
三齋の茶坊守○松永彈正切腹の前の炙○茶の湯の中水○夜の戸のさざし
桑の葉食用の實地試驗（佐藤庄五郎）
變災前知祕法

◎講義
老子若解

◎雜錄
海舟先生高談
罰を熱海のさまよひ日記（四）（悪魔の子有美）
もみぢの言の葉（四の一女史）
わが理想の男子○はせを○松林の閑居
同人社（書三通）

◎大磯だより
十一月三日（湖煙女史）

◎隨感

◎寄書
袖の涙（白百合）

◎時事
晚翠の閑書（文界斗筲の小人、有美）○明治音樂會の爲に（有美）○白馬會さ絵畫共進會（有美）○豐竹呂昇（桃花）

◎時報

◎片々

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主さして、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗敎及び敎育等に對する吾儕の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんさするを旨さす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみさ指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

女學雜誌定價表

前金	廣告料	送金
壹冊定價 拾錢 半年分定價 壹圓拾錢 一年分定價 貳圓拾錢 （內國無郵稅） ◎代金は總て前金にて御注文ありたし ◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事 ◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ實に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候	一行（廿二字詰）一回 前金拾錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるる人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年十一月九日印刷
明治三十二年十一月十日發行

發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市

東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場（電話番町十九番）

◎婦人科
◉小兒科專門 至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として溫柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを良家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし言を交すをさへ道に缺くるものとし語るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を夭折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで尊榮にして深邃なる醫學に志し研鑽多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて泥み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美徳を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科にありては第二の慈母として狎れ懷き易きが故に幼兒をして畏ぢ慄れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山彌生診察 本院午前 分院午後

本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町一番地
至誠醫院

女學雜誌

第四百九拾九號

明治三十二年十一月十日發兌

社説

秋氣靜感

早や秋となれり。木梢に花を觀、森かげに月を眺めし春夏は昨日の様にてありしに、知らぬ間に早や秋となれり。木の葉紅かく黄ろく、草の葉細くさびしく、夕暮は取わけ哀を催ふす秋とはなれり。冬の來るとも最早や遠からず、今年も殘り少なになれり。一歳何事を爲せしかと考ふれば、一事も成就せず、指を屈すれば早や四年五年を過したり。三十四十の齢と聞けば、餘程の長者と思ひける其年は早や近くなれり、而して一生の半　は經過したるなり。ゆく〳〵も斯してあ　もの乎、一生と云ふものも斯るもの乎、大事と云ふけ如何なる事か、人生の面目とは何等の事ぞなど、今は様々に思ひ出でて色々に思慮するの秋なりけり。

此の秋こそ、哀れにもあれど亦た實りもある清明靈妙の季節なり。春の花は艶にして人を醉わす、秋の色々の木の葉は靜かにして人を賢こくす。吾人は太たく秋を愛す。

左れば吾が親愛せる讀者と同もに、今に於て質實なる問題を思慮せん。華美なる好尙、浮薄なる交らひ、上わ面なる事業に躍る騒々しき意馬心猿を鎭めて、事物世態の眞相に着眼し、何事も根柢あり、道理あり、人情ある所ろに思ひ入れて、試ろみに一向專念すれば、礑と思ひ當りて頓悟會心するものなからずやは。浮々として斯てはならじ、至誠未だ足らず、苦心未だ足らず、經營此の分にては未だ足らずなど心付きて、醒然として悔悟發明する所なからずやは。

凡そ、思慮して實行せざる人も不憫ながら、實行のみして思慮せざる人も亦た氣の毒なり。餘計の損を爲し、無益に徒勞して尙ほ氣の付かざるは、餘りに進路にのみ急げばなり。百

日の苦心が一日の斷行に及かざることあれど、十年の奔走が一夜の靜慮に及ばざること更に尙多し。今人寧ろ靜慮を欠く、靜慮は秋に於て恰かも好し。吾黨の同人、寧しろ今にして暫らく之に耽らずや。

物價騰貴の大勢

◉物の直段の高くなるは、第一、品物の拂底な故で、品物の拂底は、需める人が多くなるか、產り高が少くなつた爲めである　然し、値段の高くなる原因は、之だけでなく、第二には、流通貨幣の增減によるので、即はち、錢が多くなれば必らず物の値段が高くなる譯である。其の理合は、至つて明白で、多くなるものが安く、少ないものが高い筋道ゆへ、錢が多くなつて錢が安く、品物が割合少なくなつて（錢に對する比例上、元よりは減じたるなり）其品物が高くなる丈の事である。而して、錢の多くなると云ふは、如何なる譯かと聞けば、日本銀行で兌換券の發行を增したとか、外國から償金が這入つたとか、金銀銅錢の產出が俄かに增したとか云ふ樣なる場合である。

◉右第一の場合には、品物の內、何々が高くなつて、何々は元の如くであると云ふこともあるが、第二の場合には、品物の値段は總躰に上つて來る。之は總べて錢で價格を勘定する其錢との關係が變化したからである。

◉物價騰貴の大元因を、先づ此の二つと假定して見れば、騰貴は必らずしも憂ふべきものでなく、隨がつて救ひ方も左程六かしひものではない。先づ品物拂底の故とすれば、價の高き故に買ふことを減らし、作り手は、直段の好き故に作ることを、增して、遂には平均して元の如くにならしめる。唯當座の高低で、波瀾と見れば差支へないことである。又、錢の多くなつた故とすれば、外國から品物が輸入せられて、錢が輸出せられ、之も亦た次第に平均して當然の地位に復して來る。必らずしも、大いに憂ふべきことは無いのである。

◉但茲に物價騰貴の元因となるものゝ中で、一事憂ふべきは、奢りと云ふことである。即はち、人民の生計が高くなつて、生産費を增し、賃銀給料日雇手間とも云ふべきものゝ騰貴することが尤とも憂ふべき一事である。之とても、自由貿易論の

主義から言つて一笑に附する理窟は幾らもあるが、今日列國相對する上、就中新進國たる日本が、對岸に支那と云ふ國を控え乍ら、大いに世界に雄飛せんとする目的に對しては、深く憂ふべき一事である。

◉生計が奢つて來れば、是非とも賃銀は増されねば成らぬ。賃銀が増せば、製産物の値段は隨がつて高くならねば成らぬ。而して、此の製産物が高くなるゆへに、此の製産物を生計に使用する入費彌よ嵩み、尚以て賃銀を増さねば成らぬと云ふやうに、トン〳〵拍子にせり上げるものである。

◉先づ月給取の身分に就て考へて見ると分る。今の百圓取りは、前の五十圓に當る貨幣制度だからと云ふ故では決して無い。今の百圓取りは、前の五十圓取りよりも究々して困つて居る。夫は、ナゼ困るかと言へば、唯だ生計が奢つた爲めである。彼等の奢りの増したヿは實に非常なヿである。

◉此の月給取りと同じ工合に、日雇かせぎが其賃銀を増した。而して、増したにも係はらず、困り方は前よりもひどくして、借金の殖えたヿも亦た前よりも多い。

◉上下官民此の流義で互ひに押合ひ、競つて奢りに耽るやう

に爲つて、彌よ物價を騰貴させた。「物價が騰貴すれば、賃銀給料もつまりは騰貴する、決して憂ふべきではない」ナドと言ふものもあらふが、夫は奢りの増さぬ時で、唯だ金の呼値段の多くなつた時に丈け言ふヿである。奢りを増し、生計が進んだと云ふ一事實からして騰貴に及ぼす影響は、眞に國家の爲に憂ふべきヿである。

◉例へば、西洋人の事で證すれば、彼等は文明開化と唱へて大に生計を高め、驚ろくべき奢りに高じて來た。左れば、其もふけ高の金高の巨多なると同もに、其の出費の金高も亦た莫大の事で、差引彼等が困究する工合は、貧乏人と同じヿである。西洋各國で、其富を増したヿを調べると同時に、其の奢りの増したヿを調べねば、實際の眞富の幾何あるかは分らぬヿである。即はち、西洋人は彼等の本國丈けの商賣では迚もやり切れぬやうになつて來たのである。彼等が支那分割などと言つて、切りに支那の富源に垂涎し、亂暴手段を用いて迄、他國の富を奪はふとするのは、必竟、其自國丈けでは食へぬやうになつて來たからである。支那人が外國に出稼ぎするのは、本國に多くある金を放資する必要上から促がされる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ものが多くあるが、西洋人が支那などへ來るには、本國の金丈けでは暮らせぬ故に由るものが多い。實際の眞相は丸で想像とは違つて居るのである。

◉斯く言へば必らずしも一概に支那人を賞めて西洋人を貶すと云ふ譯ではないが、生計に奢るものと奢らざるものとの國家の上に及ぼす影響の大いに相違することが直きに分るから、言つたのである。何程もふけても奢るものは矢張り困る。奢らぬものは、いよ／＼富を積んでいよ／＼もふける。支那人は生計に奢らぬからして、其物價は至つて安く、安き故に彌よ廣く世界に賣れるが、西洋人は西洋人同士が互ひに物價を高くしてお互ひに困つて居る。創業國たる日本が倣ふべきは決して西洋風ではない、全たく支那風にせねば成らぬ。

◉左れば、物價騰貴の元因中、ただ眞に憂ふべきは、奢より來る騰貴であるが、不幸にして此の騰貴の大勢が年々彌よ增進せんとする、眞とに國家の深憂である。之は、一人の手で救ひきれぬやうではあるが、一人一人段々に其風になれば即はち救ひは直ちに行はれたのである。主婦たる人の手に於て施こし得る大救助策は、今や眞に此の一大事である。

花役者の家庭

一代の名士風雲に際會し、煥發して爛熳たる花役者となる時には、門前後庭のにぎはひ、宛がら朝たに開く市の如し。然り、市のごとし、來るもの大抵、利を射んと欲す。利にして獲べからずば、亦た何の暇まありて重ねて伺候の煩わしきを取らんや。

然し乍ら、春の老ひ易く、盛りの消え易きとは、當時にありて人の氣付かざるものぞ。興に乘じて舷を叩くものは、水の流るゝを知らず、醉ふて亂舞に狂ふものは、花の散るを覺らず。盛春流光の榮華に中して、運氣正さに央んなる時に當りては、人誰か秋風落莫の哀れを念ぜんや。花役者の家庭にありて、獻物、見舞、阿諛、屈從等の滿潮に乘せられたる族らは、他日引潮の寒さとみそぼらしき光景とに思ひ到ると少なり。人間の醉ひ易き、寧ろ甚だしからずや。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

昨日は一代に歌はれて、交際社會の花となり、今日は忘れられて、失念の土中に葬むらる。門前、草長じ、雀羅、蜘蛛の巣を張る。高樓巍然たり、表札依然たり、只だ勢ほひの轉ぜしと、流行の去りしとによつて、人顧みずして訪はず。豈に悲しからずや。

左れど、丈夫此の悲しみに會ふ、遂に何程の事ぞ。立志當代に盡さんと欲する所のもの、豈に此しきの無常によつて落心せんや。花さかば冠ぶるべし、花落ちば翳ざすべし。惣べて無心にして其開落に對せんと寧ろ吾輩の勸告する所ろなりと雖ども、其家庭をして屢ば變化に會はしめんは、眞に忍ぶ可らず。流轉無常に覺悟せる花役者の輩儕も、此の一事の爲には豫かじめ準備する所ろなかる可らず。

昔し諸葛亮の如き、所謂ゆる花役者をもて喩えんには餘りに重厚なりき。左れど、彼丞相となりて復興に任じ、慨然として澄清に志ざす時、其家庭の爲に備ふるや極めて質實、苟くも權勢の奢に怙れしむるヿを甚はだしく懼れ、八百の桑、二項の田、長久えに家政の基礎となりて、俄かに之より變化するヿを許さゞりき。乃はち是れ志士當に則とるべきの金誡にあらずや。

奢りは長じ易きものなり、一旦開化せしめたる生計は、殆んど挽回するを至難となす。衣食の進步したるもの必らずしも衛生に利あるにあらず、反つて往々は人を弱くするものなり。左らば、何の故ありて俄かに衣食を善くし、生計を高くするぞと言ふに、必竟只だ興に乘じて奢りに怙れたるのみ。左れど哀れむ、其の興暫らくにして消え、其奢久しくも續かざるべきに、奈何んぞ容易に假初めの榮耀に溺れんとはするや。其の老母と賢妻とをして、亦た其可憐なる小兒をして、他日如斯き急激なる變化に出で會はしめん程なりせば、寧ろ初めより暫しの夢を結ばしめざるに若かず。

花役者たらんほどの名士先生は自負心の強きものなり、必らずや立身の望を自から信じて、區々たる一家の維持何んかあらんと、輕蔑し、他日の緊縮を豫圖して久しく生計を低くする如きヿを、意氣地なきヿの様にも思はるゝなるべし。其の鋭氣は盛んなれども、其未熟は憐れむべし。苟くも、操守を堅固にして、大抱負を遂行せんとするものは、斯る不用心の覺悟にては、大事殆んど覺束なし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

近くは、西郷南洲、勝海舟等に於て、著るしく此の覺悟の練熟したるを見たり。其の權勢の地に就くときも更に加ゆることなく、其の去るときも別に減ずることなく、家門依然として元の如くなる修養に至ては、豈に家庭の素養に於て嚴然たる克己の存せしが爲にあらずや。左れば、高官を乘ること、敝履を脱ぐが如く、脱いで而して寒きを覺えざるの操守は、寧ろ平日の覺悟より淵源せるなり。志士眞ことに之に倣ふことをせば、獵官の必要もなく、かぢり付の必要もなからんものを。

左れば、花役者の家庭に主婦たるものは、夫と同もに醉舞することなく、苟且にも一時の興に乘ることなかれ。臨時の收入をもて臨時の支出を辨ずるとも、本來の家政は根城として苟且にも増減することなかれ。其子は決して權勢の餘威を假ることなく、其身は決して榮花の色に染ることなく、郎君の花芝居は只一時のお役とのみ心得、暫らくにして其務は了るものと覺悟すべし。

夫れ、本丸にして動かざれば、城はいつ迄も落ることなし。名士の家庭にして素養を失はざるときは、花役者の基礎は万代ならん。歳々年々花復咲かん、花に根柢あれば也。

怒り易き人に告ぐ

（巨燵辨慶の男子に告ぐ）

（怒り易きは虚僞多きなり）

青柳有美

憤りは、天につけるものならんめれど、怒りといふものこそ、げに地にある子等の、下すばりたる根性にこそあれ。世に何人の作り出しけん、『憤怒』となん綴る熟字ありて、この二つをば相等しきものゝ如く傳へしめしぞ、上なき恨みなる。されど『憤』と『怒』との異なるは、なほ日輪と金盥の異るが如く、孔雀と烏の相違ふが如くにて、君子と小人との岐る所は、たゞ怒り易きと然らざるとのけぢめに外ならざらめ。さるを、堂々たる士人の、怒り易きを義人と心得、之を男子の華の如くに思ひなすものあるこそ、いと悲からずや。故に以爲らく、『憤』は是れ義なる善神の影にして、『怒』は是れ猛き獸性の發展に過ぎざらむかと。

善神の憤りは、大空の廣きが如くにそれ廣く、大洋の深きが如くにそれ深し。而して人容易に之を知る能はず、たゞアッシリヤの亡び、グリースの壞れ、ローマの倒れたるを見るのみ。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

『憤』とは、筋肉を動し、皆をあげ、聲を勵ますのゆゑに非ず。是れ匹夫の怒りなり。古きカルセーヂユの邦が、熱烈忠誠なる幾萬の市民を以てして、なほ羅馬の兵燹にかゝりしは、其怒りを早くせしがためならんのみ。人一たび事に當りて、匹夫の怒を逞しふすれば、萬事すなはち茲に休む。されば、徒に虹の如き虚榮を望んで、華々しく終を潔よふせんとするものは、まづ怒るべし。されど、長久に生き末代に立たんとするものは須らく之れをやめよ。それ『怒』は發し『憤』は藏くる。藏くれ潜むもの、一たび現はるれば、則ちレバノンの香柏をうち碎き、古今の帝國を絶滅せんも、煙の如くにして絶ゆることなき『怒』は、たゞ煙の如くにして、人の眼を、ゑぢからしめんのみ。もし正義公道の傷はるゝを見て、我が心平ならざれば、須く憤るべし。而して之を潜むべし、胸底百尺の下に潜むべし。何ぞ輕々しく怒ることを夫れ要せんや。されば、人の怒るや、正義公道の傷はるゝが故に非ず、たゞ其身の傷けられ、我が身の辱めらるゝにこそこれよれ。辱めを忍ぶは佛者十善の一なり。之に耐る能ざるを下司とぞ呼ぶ。更に思ふに、**怒り易きは虚僞多きなり**。夫れ虚僞は砂の上に建てたる糊ばかりの紙城の如く、一夜仕立の際物に似たり。風少しく吹きすさべば、將に壞れんとし、雨僅に之れに衝れば、忽ちにして破る。是に於てか、虚僞の儕輩は、終日終夜、束の間も靜かなる能はず、戰々とし競々とし、偏に我が樓閣の毀はれ潰れんことを恐る。蓋し止むなからんか。恐るゝものは守らざるべからず、又、防がざるべからず。故に怒るなり。烏賊は、その身軟弱にして、我れに敵と競ふべきの兵器なし。こゝを以て、漸く墨汁を吐いて襲ふものを暗らめまぎらすなり。世に虚構多く僞りあるもの、怒ること早きも、又此の如し。人をして、その爲すところにまかせしめば、我が化粧の皮は幾何ならずしてはがれ、勞苦啻ならざりし折角の金箔仕上げさへ、見る影もなき乞食姿と變り、拜めるものは唾すべく、交はれるものは遂に棄てなむ。さればとて、我れに素より之れと戰ひ爭ふべきの實力健腕なく、退かんか破れざるべからず、進まんか勝つ能はず。是に至りて殘れるもの、たゞ『怒』の眼潰しを敵の前へに投げて、之れを苦るしめ却りぞかしむるにあるのみ。紙城の危機、今まやげに一髮の間にありしなれ。故に以爲らく、『怒』は烏賊の墨汁に似て、虚僞

豐かなる卑怯ものゝ武器に過ぎずと。

また自ら力に滿つることなくして、虛僞漸く其體を持するが如きの輩は、常に見え坊を職とす。見え坊は寛仁なく、忍辱の志を絕つ。否な寧ろ寛仁なる能はず、辱を忍ぶに堪えざるなり。我が心、うち既に疚しければ、猜疑の傾また自らにして夫れ强し。少しく傷つくるものあれば、其傷によりて或は蓄ふるところの淺く、持するところの弱きに看破せられんことを恐る。蓋し自然の勢ならんかな。故に、虛僞の輩一たび辱めらるれば、こは、彼等浮沈存亡の秋なれ。是を以て怒ること先づ早く、うろたへふためきて其傷を覆はんことに之れあせるなり。されど、賢者と能者とは、然らず。辱めらるゝことあるも、我が骨固く我が肉强ければ、傷けらるゝことなし。また擊ち攻め吹き濡らさるゝことあるも、倒るゝの煩ひなければ悠として驚くなし。故に怒の要なきなり。

されど、飜て又思へば、辱めを受けて怒り易きは、人の至情なり。されば、怒りを早くするの人々とて、一槪には、むべからざるものなれ。しかはあれど、敢て曰はん、辱めを受けて怒るものは、其辱めを我れに停め、辱めを受けて之を忍ぶものは、其辱めを彼れに歸へすと。故に人あり、我れを損なひ、我れを傷けんと計るとも、徐ろに怒ることをやめて、茲に先づ、彼れの我れを窮め傷はんとする根と、我れの之を忍ばんとする根との、根比べを始むるの心掛けとなるべし。根くらべとは生存競爭のことなり。却說、難有き優勝劣敗の大法は亦この間にも行はれて、我れの之を忍ばんとする根にして、彼れの我れを傷なはんとするの根に勝たんか、辱しむるもの、却つてその手ごたえなきにあぐみ、所謂根まけとぞいふ姿になりて、遂に其矛を棄るに至らんめれ。那嵛烈翁のモスコーに破れたるは、露軍の逃げ退けるが故なり。陰なくして陽はなきものを。怒りを强ふするは、辱めを深ふするの所因とは知らずや。然らば、如何にしてか忍ぶべき。たゞ修練にあるのみ。今もし怒りの一念、怫然として胸中に迫らば、先づ忍ぶべし。始じめて之をなす素より易からず。一ヶ月二ヶ月にして漸やく易く、六ヶ月にして全たく易く、遂に過て一歲半なるに至れば、人に唾され溺せらるゝも、些かの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

佛然たるものなく、身を以て悠然自適し、寛廣大仁の德あるを得べし。されど、修練の前、豫め顧るべきは、虚僞と見え坊との我が心を汚すものなきや否やを、質さんことの二事にあり。夫れ『怒』に易きは、その病ひするところ眞に玆に存す。故に、もし人をして怒らしめんと欲せば、好んで其實なきに飾り、物なきに構ふるところを衝き、以て其態度をひるましむるにあり。怒り易き儕輩の齒するに足らざる、眞に知るべきのみ。轉然として改め修むるところなきを得んや。誠意以て世の怒り易き人に告ぐと云爾。

家風と育ち

紫琴女

◉生國を何處と聞ての成程と點首かるゝ性格は、十中の八九人なる可し。されどなまなかの二度喫驚を御念までにさし上ねばならぬがある、是にはいろ〳〵身の上もある可けれど、就中反動性なる人の、其國振りを厭ふのあまり、自分は頓と飛離れ過た變りものとなりゆきしも多かる可し。是などを一眼に見て、其地の産にてはあるまじと訝るなどは、餘りに人

を死物視したる早合點ともいふ可きにや。勿論かゝる種類の人とても其國振りに反動せる間こそは、全く異質の觀をも寫すれ、變りたる土地の、變りたる人中に置けば、矢張其國の香失せぬにも、家庭の人を生むのみにはあらで、土地の人を生む因緣は知らる可し。只ゝ仕入向に産物に出來たると、少しは夫に見飽きての、細工を我から施せる、此處や鑑定家が審査を要する點なる可し。

◉是と同じ道理にて、人の育ちし家庭の如何を推案するにも、見やうの二種はある事なり。謹愼なる人の、規律ある家庭に生れ、我儘ものゝ、取締りなき家庭より出たるなどは、あまり手近く、研究として何の興味あるものにもあらず。夫よりは餘りなる偏屈ものゝ、却て放埓なる家庭よりいで、此上なき放埓ものゝ、まことは嚴格に失したる家庭よりは出來れる反動の行程を探らむには、家庭敎育の參考に資す可きものは多かるべし。我見たるだけにても、親の酒に懲りての子は生涯禁酒を心に誓ふがあり、守錢の家に是は又餘りなる散財の子生れたる、さりとては又母親が生涯を妾に氣兼もせし氣毒さは、娘が一夫一婦の主張となりゆくなど、いはゞなか〳〵

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其種多き事なる可し。されどかく一の極端が他の極端を生みし反動の子は、等しく一方に偏せりといふが中にも、普通ならば調和すまじき慣習の微細の點には潜み居る事なかる可きにや、若しあらば其幽かなる面影ぞ、其人が正反對の家庭に人となれる秘密を語るものなる可し。

◉似たるためしの、是は反動にあらぬながらの、結果は同じく矛盾せるがあり。其一つは無藝なる親の、おのれに懲りて、子は恥なかれかしと多藝には仕込つる、扨は又おのれの多藝、何の要ありしにもあらずとて、子の無藝を、さして憂とせざるなど、些は遺傳を後天に左右せしむる媒なる可し。

◉またも似たる例をひかば、親の束縛に懲りたる父母の、子は些自由を得せしめたしとての、放任には流れたる、あるは又其放任に懲りたる子の、我子には壓抑を旨とす可きを誓へるなど、愛はさるべき事なるも、心す可きものなる可し。

◉此子は女子らしからじとての身裝にも、赤きものつけさするはよけれど、阿轉婆なる少女の、赤きものは似合じとて、男めきたる裝ひさする、其當時こそは、動作と似合の、釣合はよかる可し、後に其芽を大きくするは、かゝる微細の培養法にも存せずや。

◉人に任かす事の出來ぬ人は、おのれも亦責を負ふ事の出來ぬ人なり、おのれ責を負へぬからの、人も亦負ひ難きかとての案じなる。されば人にさせて口出す人は、我事もおのれには取極め付かぬお人善しの、難は疑ひ深きが玉の疵と思ふてさへ居れば、大きな間違なし。干渉深きを小言くなどは、此方もお人が善過ぎはせずや、夫よりは先方を慰めての疑ひを休めた上で、おもわくをいふて見たらば、知らぬ顔の半兵衞もどき、一切任せた振をして、まことは心の眼から睨んで居るしようわるの鷹揚な人よりも存外折合は付き易きものなる可し。

空聲非一　　さき子

いつれをか空にすむ音さきゝはかむ野邊さはかしき空の聲々

秋夜

秋の夜は月みるたにもかなしきを又うちそふる山寺のかね

月前感

さよふけて月にはめくりあひしかど別れし人やいつこなるらむ

はなれゐてかたみに戀ふる心こそなかむる月の上にあふらめ

紫式部

九重の雲の上をもてらしけり石山寺の秋の夜の月

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

拜啓。陳者、過日の女學雜誌上に、一婦人の、肺病の方々なる題を掲載せるものを、一讀仕候處、彼女の覺悟は、彼女及或部分の人には至極なる可きも、他の有望の肺病患者には或は却て有害となるへきを思ひ及び世上の迷妄を破りて病者に戰鬪の勇氣を與へんと欲するの餘り、劇務の餘暇一篇を草して、貴社に送呈仕候間、語句の誤謬あらは訂正して、女學雜誌に御掲載被成下度奉願候

仙臺、無識生。

肺病は不治の病に非す

肺の病には種々ありて、容易に治癒するもの少なからずと雖も、予が此に述べんとするものは、肺病中最多くして且つ通常慢性に經過するところの一症、即ち肺勞又肺結核と稱するものなり。此病症は、好て有爲の青年を襲ふものとす、豈慨すべきの至りならずや。人一旦本症に罹れば、早晩必らず本症のために斃ると思ふは、從來の誤謬なりし そも斯く信ずる原因は、知人の死亡を見聞し、且つ現今醫學の進步に伴はざる醫の言を信じたるに出でたるならん。夫れ、人或病にかゝり 之によりて早晩死を免れざる事を確信せば、先づ落膽失望するは人情の當に然るべきところなり。凡ての人は死すべきものなり。我も人なり、死するとや何をか憂へん抔と、速に悟りて平然たるものは、少なかるべし。多くは、憂愁鬱悶悲哀等のために、肉躰には新心理學に所謂生理的共鳴を崇り、爲に生存期を短縮するが如し。之等幾多の亡靈に對して豈憐恨の涙なくして可ならんや。予は詩人にあらずと雖も、亦た涙多し、地下幾多の亡靈は、無差別絕對に融合し終りて、現世に於ける予が慰藉の要なかるべきも、予は勃々たる惻隱の心の牽ゆるところに從つて、現世に於ける夥多の肺勞に向て、心性を慰安し、兼て興奮起勇の一劑を呈せんとす。予は醫學進步の現況、及自家の實驗を基礎として、立論するものなり。讀者の先入の妄信を排し、虛心、予が次に述ぶるところを一讀せよ。

醫にして一切の肺勞は治すべからずと云ふものあらば、吾人は、其頑迷無智を笑はざるを得ず。然ども、世には稍有識のものにても、世界學術進步の趨勢に反して、頑として自家の所信を變ぜざるものあり。今日種痘、或はヂプテリア血清療法の如き、偉大の效驗あるものにすら、倘反對するものあり。之と同しく、肺勞の治療に對して、亦否定するものあるべきは當然の事なり。然ども、肺勞治療には種類あり、其の治療の意義によりて、意見を異にするを多しとす。最近時の報告

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

によれば、罹患肺臟の全く健全に復するもの、所謂解剖的及び組織的治療と稱するものは、稀に存在すと云ひ、發病の早期に發見せられ、最も適切なる治療を施したる輕症にあらざれば、此効果を期する能はざるべしと雖も、他の意義に於ける治療は、吾人の屢々遭遇するところなり。次には主として第二の意義に於ける治療に就て述べんとす。

肺勞は、三期に分つことを得。第一期は、治療上最有望の時期にして、獨逸の或大家も、近時報告して、此期に於て適切なる治療を施すときは、殆ど凡てを救ひ得ることを公言せり。之より病機の進歩するに從て、治療愈々困難となる。然れども、第三期即ち病機の甚しく進歩せる時期にして、諸部に腔胴と稱する大なる欠損を生せる時期に於ても、倘且つ稀に治療したる例あり。現今內科に於て廣く愛讀せらるゝ或一書には、「未た甚しく擴大せざる病竈は治療することを得」とあり。病竈とは、病患の局部と見て可なり。予が玆に言ふところの治療とは、一旦侵されたる部分が、俗に所謂固まることにて之より周圍に蔓延せず、患者の營養は久しく佳良なるものを言ふ。此の意義に於ける治癒は、世上其例に乏しからず。

近來病躰解剖の術進歩し、他病によりて斃れたるものを解剖して、偶然肺に於ける結核の治癒せるものを發見すること屢々之あり。或大醫の說によれば、此の如きものは、實際醫師が遭遇せるよりは、多く存在せるならんと云ふ。其中には醫療を受けざるも自然に治癒せる者あるなり。醫にして十年の昔は措て論せず、醫學進歩の現時に於て、しかも倘肺勞にかゝるものは早晩必らず此病にたゝつて斃ると云ものあるか。抑も固まるとは、醫學上に瘢痕と云ひ、躰の外表に於ける腫物の破れて治癒せる痕、或は火傷の痕の如きものにして、勿論皮膚の一部に深き瘢痕ありとすれば、其部の皮膚の作用は消滅に婦すると雖も、何んぞ健康を害せんや。肺に於ても亦然り、或一小部に瘢痕あれば却て他の健全部は代償的に機能旺盛となる。一側の肺が全く消滅するも、倘偏肺を以て生命を保持するものあり。况んや、一小部に於ける瘢痕、何ぞ生命を危害せんや。

人の此世にあるや、周圍皆敵なり。結核軍に襲はれたる天下幾多の才子佳人よ。城壁の一部已に破られたるを知て、俄かに杞憂することを止め、勇氣ある戰鬪の準備に從事せよ。小

敗衂に屈するとなく、頑として抗抵せば、最終の勝を制するの望あり。來れ滿天下の肺勞者、奮へ起て、持續的の興奮は實に戰鬪力の母なるぞ。

予は素と文を能せずと雖も側隱の心禁ずると能はず一夜筆を執て深更に及び腦髓疲勞を覺えたるを以て清書と亂文を顧みるの遑なし、編者夫之を諒せよ。

十月廿二日　　仙台　無識生

書齋庭訓

山下石翁

○三齋の茶坊主

細川三齋、親しき人四五人うちよりて茶を飲し時、水こぼしに下水滿しかば、茶道坊主水をこぼさんとて座をたゝんとせしに、其まゝ茶をたてよとありしに、すべきやうなければ、すこしゐりぞきて、その水こぼしをかたぶけて、水を飲み、身をそばめ懷なる紙をとり出し、口手など拭ひて、おしなをりて又茶をたてたり。よくはからひしよしにて、後に引出物給ひしとなり。物ごとに機轉あるべき事なりと、其座につらなる人のかたりしを聞けりと、新井白石の秘書に見ゆ。

○松永彈正切腹の前の灸

松永彈正、松虫を飼けるに、さま〴〵に養ひければ、三年までいきけり、況んや人間の養ひにより長命ならんと、疑ふ可らずと言はれし。此人、信長と戰ひまけて自害に及びぬるに、百會に灸していひしは、之を見る人々、いつのための養生ぞやと、さこそおかしく思ふべけれ、我常に中風を患ひぬ、死にのぞみてもし卒爾に中風發して五體、心にまかせず臆したりとやいはれん、百會は中風の神炎なれば當分其病を防ぎ、こゝろよく自害すべきとのためなりとて、灸をしすまして腹切りしとなり。

○茶の湯の中水

風爐の茶湯に、中水をさすと云ふとは、利休不時の茶湯に、茶をたてし時、茶碗へ茶をすくひ入、そのゝち水さしの水をたぶ〳〵と汲て釜へ入しより、何の故もなくはやりしなり。高山左近、柴山監物の二人、不審に思ひて曾て利休に問ければ、されば、その朝、客ありて其釜の湯なりしかば、湯を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

改ためんが爲に水をさしけるなり、定りて中水をさすと云ふ事をば知らず、問たまはずんば申まじきに、よくこそ問ひ玉いたれとて、よろこびしとなり。

○夜の戸のとざし

生れつきて盗賊となるは少なし、皆なさまぐ\の誘ひによりてなり。夜々門戸を固く鎖すは、ひとり用心の爲のみならず、人に盗心を起させぬ慈悲の基ひともなるものなり。菅茶山が筆のすさびに云く、備後の鞆の祇園舍に、某屋といふ小間物屋の前街に人の群集する中にて、盗の物とらんとせしを人に見付られて、海濱へ別出て海へ沒ぜんとするを見て、店の主はしり出で、其罪を詫び救ひければ、會終りて後、一人つと入來り、私は先日御たすけにあづかりし盜にて候、一命の御恩を謝し申さんとて參り候といひしかば、主人の其本心のいまだ亡なはざるを憐れみて酒のませて物がたりし、其意とゝきて盜を止させんとなり。盜も感泣して別れける。其の物がたりのうちに、凡そぬす人の入るは、表の戶裡門のあきたるを見て、心を生ずるは多し、人皆な寢んとする時、必らず門戶は閉せども、或は若き男女のあそびありきなどに出行、やがて却るべしと思へども、とくにも却らず、或は戶ざしすれども眠ながらにして固くさしえずなどする事あり。戶ざゝば必らず主人おのれ自身すべきこと肝要なり、壁をうかちているぬす人、おどりこみなどは此例にあらず、此用心はまた格別なりといひて返りしとなり。

桑の葉食用の實地試驗

編者曰く、救荒の策は豐年に於てすべし、もし平時に心づきなくば、時に臨みて如何んせんとするや。在北海道の知人佐藤氏、此に慨し、凶荒飢餓を避るの一方を案じ、自から實地の試驗を爲せり、左に掲ぐる所は、其報告なり。

凶荒飢餓を避る法

發見人　石狩空知郡奏仁村　佐藤庄五郎

世界の大勢は駸々として進み列國との關係頻繁を加ふると共に之か權力を保持せんか爲め陸海軍事に外交通商に國庫の費途少しとせず隨て國民の負擔年を逐ふて增加す又一家生計の

程度も自然に高進するは火を見るより明かにして貧民の生活日々困難に陷るや又不得止也是に於て備荒貯蓄は一國經濟上大に注目すへきは敢て余の贅言を待たさる所也雖現今我國の人士備荒貯蓄を口にすと雖も未た嘗て之か實行を企だつるものなきは豈慨嘆の至りならすや見よ去ぬる二十二年及三十年度に於ける不作にて全國收穀僅かに四分の一内外の減少と雖も全國貧民の困難言ふに忍ひさりしにあらすや若し不幸にして一朝天明天保年度の如き大凶歳に際會せは何を以てか之か救濟の策を講す可き嗚呼我國の前途實に憂慮に堪へさるなり故に余は之か救濟の道を計らんが爲めには須く山野に繁茂せる草木の葉を以て之を補ふを發見するに非らされは我四千有餘萬の同胞をして大凶歳に當りし時飢餓を免れしむる事能はさるを思考する久し而して余は多年蠶業に從事せし結果蠶業の利益と共に桑葉を副食として害なきを發見し其凶歳に當りて救荒の食料となることを研究したる所以也

抑も桑葉は凶歳又は水害の爲めに收穫を減せさるのみならす落葉期に至りて桑樹に害なきの時之を採取して備荒貯蓄となし且つ之か調理法を研究して平時穀菜の副食物とせは其利益蓋し僅少にあらざる可し故に全國農民をして蠶業奬勵の爲め且つは備荒貯蓄の爲め蠶業に從事せざる者と雖新に桑園三反歩を起さしめは蟻量八匁以上を掃立つることを得のみならす養蠶後落葉の期節に至りて採收せば桑葉大に且つ肉厚きを以て三反歩の收葉優に九百有餘貫を得可し之を貯藏したらんには凶歳に遭遇するも一人一日百匁宛〔穀菜折半〕を食すれは穀菜を半減す可し然らは一家四人と假定し貳百貳拾五日を支ふるに足る玆を以て全國中蚕業地と唱せらる長野群馬福島の諸縣及び出羽北海道其他全國に散在せる桑葉を採收して貯藏せは天明天保年度の如き凶歳と雖も敢て海外より米穀を輸入するの要なく却つて無用視せられたる殘葉を以て全國四千有餘萬の同胞をして飢餓を免れしむる事易々たるに非すや況んや本道に於ける昨年の如き洪水にて穀菜を流失し剩へ鐵道破損し道路遮斷し運輸の便頓に絕すると雖も野生及び桑園の桑葉を採食せす全道人民をして飢餓に迫らしむるの憂無きや必せり

噫桑葉副食の邦家を裨益する廣且つ大なりと云ふ可し

幸に諸官廳及び全國有志の士左に連記せる余の實驗說をして一讀の榮を賜はり更に進んで之か奬勵の道を計られんこと

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

希望に堪へさる也

此の試驗にして一朝誤りあらんときは空しく一命を失はんか又は終世病痾の身とならんか頗る危險の業と雖も余は元來邦家の利益を計ることに於て一身を犧牲に供するの念慮に急なるを以て決然之か試驗を斷行することとなれり

爾三年前より此試驗を結成せんと欲すと雖も其機會なかりしを以て本年七月春蠶を了へてより再出の桑葉を採取し去る九月初旬より飯中に混和し又は副菜として食したる後醫師松江氏なる者に身躰の診察を受しに一つの害なきを以て尚多量に食して隔日に診察せしむること前後十一回日數即ち廿一日間に及と雖も身躰は常に異なりたることなし又家從の者にも十日間食せしめたるに余と同一なりし故に余は其成功せる事の悦に堪へさるを以て尚進んて平時の副食物となさんと欲し日々其調理法を改良しつゝあり尚試驗の詳細は醫師松江氏の診査狀に就て探る可し

醫師松江氏の談によれは甞て桑葉を茶に製して飲用せし人ありしに其人年來持病の頭痛を治し又便通を宜しからしむる功ありと果して然らは本道の如く飲料水惡しく農民に種々なる疾病ある地に於て桑葉を茶に代用せしめは患者の幾分を減するを得可し

又暖地は刈桑なれとも東北地方及び北海道は立木造りなれは惡しき枝を掃ひ年々欠乏を告けんとする薪炭の幾分を補ひ家計の一助ともなすを得可き也

調理法及び貯藏法は左に列記するか如し

桑葉調理法

一生葉を熱湯にて煮沸し青汁を去り之を細切して米麥に混和して食するを得可し

一生葉を熱湯にて煮沸し青汁を去り之を細切し汁の實となし食するを得可し

一生葉を熱湯にて煮沸して青汁を去り之を細切して煎味噌に混和し米麥に和して食するを得可し亦漬物代用にするも宜し

一生葉を烹るには桑葉の厚薄により時間に長短あり其軟かになりしを適度とし青汁を去り青き臭味を去りて食すへき也

一茶の代用とするには其製法茶の製法と同一にす可し

一生葉を天日に乾燥して細粉と爲し或は叺に入れて貯蓄し食用とせんとするとき前調理法に依る可し

貯藏法

一生葉を天日に乾燥して布袋或は叺に入れて貯蓄し食用とせんとするとき前調理法に依り料理す可し

附言

前條試驗は全國四千餘万同胞の飢餓を避る爲め祖先の志を繼き一身を犧牲とし實行せしものなり若し不完全の事あらは倘進て山野を探索し飢餓を救ふの草木葉を發見し飽まて素志を達せんと欲す因て有志諸君に於て速かに試驗せられ其可否を報告せられんことを希望に堪へす縲言なから陳述するものなり又桑葉の分析は本年三月農商務省桑樹調査報告に詳かなり其食物として有益無害なると確信せられたし

診査狀

（石狩國空知郡奈江村南八號線八番地）佐藤庄五郎（四十六年三ヶ月）

右は體質强實にして嘗て病疾に罹りしとなし明治三十二年九月六日米麥の常食料を減し代るに桑葉を調理常食に混和試食せんとするに當り今日さ他日さ身體上に異狀を來すや否今より隔日に診察を乞ふさ云仍て同日身體を診査するを大畧左の如し

一　全身の發達及營養の佳良
二　身の長一七六、二仙迷
三　體量四八、四基瓦
四　胸圍八八、四仙迷
五　腹圍七六、六仙迷
六　呼吸數（一分時間）一七强
七　脉搏（一分時間）六十八
八　躰温三十六度六分
十　呼吸器並神經系統に異狀を認めす
十一　消化器並泌尿器に異狀なし纔かに胃部膨脹を呈す
十二　皮膚の狀態並爪、齒牙尋常毛髮は稍々稀溥の方
十三　糞便は日に一回排尿日に數回
十四　煙草は常に好ます

（畧）

以上は本月六日桑葉の試食以前の調査にして同日より米麥の常食大畧二百目さ見て其内一割を減し代るに桑葉二十匁を加へ二日を經て倘二百日の內二割を減し桑葉四十匁を加へ漸次此如く增量して米麥飯半額を減し調理したる桑葉半額を加へ試食する事十有餘日を經たり附屬食には魚類野菜汁等平常の通にして傍ら桑葉を製茶の如く乾燥して煎茶に代用し勞働の抵度に至りては常の如し爾來隔日に身體の診察を成し二十一日間を經て本月二十六日以前の如く診査を遂るに脉搏體温は勿論全身の營養上其他消化器等に毫も異變を來すを認めす因て案するに米麥の常食を半減し加ふるに調理したる桑葉半額を混和食用するも敢て身體に害なきものに似たり亦或人の言に桑葉を以て製茶の如く乾製せしめたるものは常に代用して緩和保攝の功あるに似たり然りさも未た正式の分析を行成したるに非さるさ玆に米麥飯に桑葉を混和して食用さするも三週間内に敢て身體は異狀を來さゝるものさ認む

明治三十二年九月二十七日

石狩國空知郡奈江村字砂川

醫師　松江安茂印

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

變災前知　身體保全法

鳥は風を知り、低く巣つくり、蟻は水を察して高く穴ほる。小禽細蟲すら尚ほ災を前知するとを得べきに、人として毫も其の便よりを得ざるの理あらんや。必竟は、我慾に溺れて自然に離れ、本來の天覺を失なつて故さら自から迷ふの故にあらざるか、とは、苟くも道を修むる人の屢ば自問自答する所ろなり。左れば、茲に變災前知の妙法ありと稱する人の出でんとき、只だ一概に擯斥して始めより無下に疑がふとなど決し爲じ。先づ審びらかに其の由緒を尋ね、來歷を調べ、實地經驗したる證跡に鑑がみて徐ろに當否を研究するとならん。

守田寶丹主人が多年の妙法として人に敎ゆる所の一方は、其道至つて簡にして、其の來歷極めて古きが如し。聞くならく、古し隱醫あり、常に身體保全法を講じ、知人に傳授して隱德を施こすとを好めりしが、守田寶丹氏の主人山田屋田中淸助氏、之を傳へ、田中氏亦た之を守田氏に傳へしとぞ。而して、守田氏自己の經驗によれば、

明治元年戊辰五月十五日、上野に彰義隊の戰ありしとき、一家此法を試ろみて無難なりと覺悟し、兵燹砲聲の中に、自若として談笑飮食したり。爾來、此法に據りて未だ曾て一回も災にかゝらずと。

其他、所々の人此の法を試ろみて不思議に災難を前知せしもの多く、一々其實歷を告白せるもの多し。

惟んみるに、九郎判官源義經が、鞍馬山にて天狗より授かりしと傳へて神聖にする兵書の中にも、此の守田氏が謂ふ所の一法に符合するものあり。

よつて其法を如何と尋ぬるに、至つて簡短にて眞とに雜作なきとなり。其法左の如し、

左の手を以て左右の奧齒の下にある動脈を診するに、其脈指先に感じて波動を覺ゆべし。其儘、右の手を以て左の手の脈を診し、心静かに試むるに、左右奧齒の下なる脈と左の手なる脈と三ヶ所、波動平均を得る、之を三脈一致とす。三脈一致すれば、無事安穩の兆なり。三脈亂れて常を失ひ相ひ一致すれば、身命を失ふべき大難の前兆と知るべし。此の前兆は凡そ一晝夜前に顯はる。

斯の如き法は、何人も容易に試驗し得べき所ろなれば、吾が讀者は先づ試ろみに着手せられよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

老子若解

◉老子下卷第五十六に云く、

知者不レ言、言者不レ知。塞二其兌一、閉二其門一、挫二其鋭一、解二其紛一、和二其光一、同二其塵一、是云二玄同一。不レ可二得而親一、不レ可二得而疏一、不レ可二得而利一、不レ可二得而害一、不レ可二得而貴一、不レ可二得而賤一、故爲二天下貴一。

◉知る者は言はず、言ふ者は知らざるなり。其兌を塞ぎ、其門を閉ぢ、其鋭どきを挫き、其紛れたるを解き、其光を和らげ、其塵に同ふする、是をば玄同と云はん。得て親しむ可からず、得て疎んず可らず、得て利す可らず、得て害す可らず、得て貴ふする可らず、得て賤しんず可らず。かるが故に天下の貴となるなり。

◉知る者は言はず、言ふ者は知らず……と云ふは實に名言である。知ると云ふにも色々あつて、一知半解の生ぎゝ生覺りも矢張り知つた風に見えるが、然し、之は知つた風に見える

丈けの事で、決して眞とに知つたとは申されぬのである。古人に「知行合一」と云ふ訓戒もあつて、眞とに知つて居れば行なへねばならぬ、行なへぬほどならば未だ知らぬのに違いない、知つて行なへぬと云ふ筈は無いと云ふ勇ましい勸告もある程だ。之は有力なる注意で。知り拔き、知り盡し、知り熟したるとは、わざ〳〵口に弁じて他人に高言する氣持はなくなる。まだ能く知り切らんとを少し聞かぢり、自分に物珍らし感ずるうちは、切りに吹聽したくなる。またヤット自分に瞭解しながら、また何となく不安心の心持がする間は、色々理窟をつけて、わざ〳〵人に辯じて見るものだ。之は自分にすら少々疑がわしく思へるのであるから、他人には十分辯じなければならぬと思ふからである。然し、十分に知つて、十分に明白となり、殆んど言ふ丈の必要もないほどに會得したとは、誰も特更ら言葉に喋々するとはせぬものである。例へば、吾々日本人が箸を右の手に持つて、左の手に茶碗をもち、云々、斯々の手練をもつて茶漬を食べるのだと言つて、仰山らしく議論するものもなく、辯解するものもない、皆な知り切つて居て、自分にも知り切つて居て、口に出すべき刺激が

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

少しもない柄である。」之とは反對で、よく知らぬ者に限つてッベコベと喧ましく喋べりたがるもので、第一、自分が無雜作に行なへぬから仰山さうに言ふのである。また始めて聞たか、事新らしく思ふからして、左程に珍らしげに言ふのである。而も其の大層らしく言ふことに限つて、實はよく分つて居らぬので、眞に了々達悟したるものが之を聞くときは、寧ろ憫れむべき理窟屋に陷いつて居るのである。」左らば、言ふ者は皆な知らぬので、知る者は皆な默して居るのかと云へば、無論左様なことは無い。機に接し、場合に觸れて、自然に發し來る言論談話は皆な無意識に出る言葉で、喩へば、泉より水流れ、蕾より花開くが如きものである。無理に出したのではない、自から開展したのである。昔し、大慈大悲の人が金口を開いて衆生に說法する如き、智人が玄妙深奥の思想を動かして、當代の疑惑を說く如き、皆な自然に開らく自然の言葉である。

●然し、斯様な自然の言葉ではなく、當代の論客が連りに八釜しく言論する如きことは、必竟、知らぬから言ふので、知り熟した曉には、左様な淺薄な、キマリきつたことを、今更珍らしそうに言ふ筈は無いのである。左れば、達人は、已むを得ざるにあらざれば、沈默してもの言はぬものである。必らずしも謹んで言はぬのではない、言ふべき必要がないので、靜朴閑居、花を拈じて微笑するとも、ワザ〳〵仰山さうにシャベルことは爲ないものである。」乃はち、其の兌を塞いで、多く辯ずることをせぬ。辯ずる時は、至誠より發する已むを得ざるの言葉で、的然確乎として人の肺腑に貫ぬくに相違あるまい。其の兌を塞いで喋々しく發言することをせぬと同様に、徒らに五感六根の官門を開いて、氣を散亂し、多岐に陷いる様なウスッペラの事は嫌ふものである。門戸開放と云つて、清濁併せ呑むの慨あることは勿論であるか、之も自然に爲すべきことで、ワザ〳〵力めて爲すべきことではない。況んや豪傑氣取りになつて、柄にもなく勉强してソンナことに骨を折るのは笑止の沙汰である。達人は、其口を塞いで居る、已むを得ずして開くのである。其門も閉ぢて居る、叩くものがあつて扨て開くのである。

●近來は兌角才子を好くものが多い様であるが、才も善いものには相違ないが、用心をせぬと馬鹿者と同じことになる。決

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

して才ではないのである。嚢中に錐を入れた樣に、兎角、機鋒を露わして得意で居る人は、さて〳〵馬鹿なとである。第一、何の爲にソンナに見せびらかすのだ。人に才を見て貰いたいのか。憫れむべき見識ではない乎。見せたいとか、見て貰ひたいとか云ふ心持のあるうちは、まだ〳〵ダメだ。苟くも、氣力あり、至誠あるものは、事に望んで驚ろくべき才識を出すもので、之は自分で禁じやうとしても禁じられぬものだ。ましてや、天稟上根にして、而も艱難辛苦に經歷したほどのものは、才華爛爛として、一代を驚かすとが出來る銳才は自から存して居る。別に珍らしくもないとだ。又、一氣呵し來り、至信突貫するときは、鐵であらうが、岩石であらふが、ツキ破るほどの熱心も、信仰もある、銳氣は非常なものである。然ればこそ、自から此の銳氣、銳才を捨てゝ、其の機鋒を鈍らし、事を徐ろに、見榮を實着に、功業を質朴に成し遂げんとする覺悟が出て來る。自分に銳どい所ろが足りないから之を所望するので、少々有り過るほどの族は、之を挫くの外はない。才を欲するものは、才子ではない、才子ぶるのだ。銳氣を慕ふものは、銳氣の人ではない、鈍骨である。

●糸のもつれた時に、銳利な刄で一刀兩斷するは雜作ないとだが、ソザ〳〵其の銳利な刄は控いて使わず、ゆる〳〵と指のサキで、紛れたる糸を解くのは面倒なものだ。忍耐あり、氣根ある人でなければ決して出來ぬ。而も、身は是れ勃烈たる氣力あり乍ら、其氣を沈め、其思を平らかにして、叙々として紛雜を解く。其の解くとの面倒さは、假りに糸をほどいて見ても分る、況んや、人情復雜し、世事混亂して居る間に這入つて、氣を收めて靜かに緖を見付け、段々に之を解いてかゝる。いかにも高尙な仕事である。

●ギラ〳〵したものは甚はだ面白くない。光を裹み、明を隱すは一種の風雅で、必らずしも功利の上からのみ言ふとではない。衣物でも、餘り色の鮮やかなものは好かぬ。花でも、月でも、少し陰つた方に言いがたき味はあるもので、之は幽邃靑憺の趣味である。況んや、これ赫々たる光明は、自から包みこそすれ、他に見せぶらかすものではない。鄕に入つて鄕に從がひ、俗に入つて俗にまぢり、自から其の光を和らげて、塵芥穢土の中に混同するとは、救世濟人の一方で、達人、世を濟度するの面目である。潔僻、矯激にして、たゞ自から

の正しきとを見せしめ、世の劣者に同坐しても既に汚がされたるよふに思ふものなどは、甚はだ小さい事である。世を厭うて山に入るものも、山で悟れば復た世に出かけて來るので、神、人の姿を執つて塵世に降り沒するの福音は、即はちコヽの事である。高い山から谷底のぞくと云ふ工合で、細い糸を下界に垂れ、只だ之にすがれと云ふは、無慈悲極まるとである　凛乎たり、煥乎たる氣品の御光を自から和らげて、世の塵の中に同ずる。同じく塗れず、塗れて化せず、久しふして遂に其塵をふるひ、其濁を清ますは、たゞ達人之を能くするとである。

◉同じくするにも樣々で。溺れて同化するものもあり、利せんが爲に眞似て同じ風をするものもある。然し達人が身を下し、光を和らげ、強いて鋭を挫いて徐ろに塵芥に同住するは、深妙遠邃の心掛より出る慈悲で、殊勝此上ない同化である。即はち之を玄同と云ふ。斯る玄同の思ひより、俗に入つて俗務に枯据勉勵しつゝある人は、親しまんとて親しむとも出來ぬ、なか／＼狃れるとなどは出來ぬ。左りとて、疎んずるとも亦た出來ぬ、疎んぜんとしても疎んずるとの出來るもので

口のよふになし、（閉其門）漏り出るかず、誤りに開合をひ
ろめず、氣を散らず。（挫其鋭）利口ぶらず、出しゃ
（解其紛）

はない、重寶であり、切要であり、苟しくも缺く可らざる棟梁の人である。左らば、利用せんとしても利用するとは出來ぬ、利を以て誘ふとも出來ぬ、我が器に用いんとしても用いられぬ。害せんとしても害せられぬ、害したりとて先方は少しも損害とはせぬ、況んや人情の機微に通じて圓轉の妙を躰したる達人は、明哲よく身を保ちてなか／＼害するとも出來ぬ。之を褒めたりとて、貴きを增さず、貶したりとて賤しくならぬ。眞に始末につかぬものである。夫れ斯の如く利害の外に超然とし、貴賤の外に脫け、親疎の差別を沒するほどであるから、忘れんとしても忘れられず、棄てんとしても棄てられず、左らばとて赫々の功名もなく、眞に空氣の如く、水の如くにして世に存し、則はち天下遂に缺く可らざるの重寶貴品となるものである。

◉之は、天下の爲にのみ言ふとでない、一家の内でも同じとである。達人の爲めに大きくのみ言ふとでない、家庭の主婦、卑近の賤人に付ても亦た同じとである。（知者不言）よく辨まへたものは、オシヤベリはせぬ、（言者不知）知らぬからツベコベと言ふのである。（塞其兌）よく口をつゝしんで成べく無

口のよふになし、（閉其門）餘り出あるかず、猥りに附合をひろめず、氣を散らず。（挫其鋭）利口ぶらず、出しやばらず。（解其紛）よく面倒を見て家内の尤とも煩はしいことを丁寧に處置し。（和其光）眞黒になつて、（同其塵）掃除したり。高くとまつて、目下のもの斗り使ふやうなことをせず、（玄同）よく下々の氣になつて、同じものを食ひ、同じやうに骨を折るべし。斯くすれば自づと威嚴も備はり、（不可以而親）狃れることも出來ねど、亦た疎末にすることも出來ず（不可以而疎）よく〳〵おちついて來る、左すれば、お爲ごかしに乘らず、損もかけられず、主婦も下女も同に立派になつて、どちらが貴を增し賤を加へたといふこともあるまい。斯なつてこそ眞實に貴つとくなつたと云ふものである。

秋月

眺むれば心のくまもはれにけり、　露草
枕にやどる秋の夜の月

雜録

海舟先生高談（續海舟餘波。禁轉載）

○幕府の時、年貢も增さず、新税もかけず、よくも段々增加する政費を支へたものです。何によつてソウ出來たものですか。

◉實に分らないよ

○歳入は夫でも段々に增しましたか。

◉少しも增さなかつたナー。水野の時は、マア外交の事が切迫して來て居たのだが、田沼の時は、餘程六かしかつただらふに、よく仕たものだ。

○水野の時には、實際、金が溜りました乎。

◉金のナマコ板が二十六、銀が十幾つと云ふもの出來た。

◉隨分ひどく取締つたが、實際の工合はおかしいよふだつた。遣ひ物でも、鹽竈一ッが一番小さかつた、代は十六文位のものだが、其の下に銀が五兩づつ張りつけてあつた。」八百善や

八百松の料理でも、五寸の重箱二つの料理が百五十兩から二百兩位のものが出來た。皆な撰りぬきの珍らしい、新らしいもので仕たよ。」鯛の目の下の肉ばかり取つて吸物落しにするしチ。菜のひたしものでも、炭火の室で、ハシリを作つて、丈をそろへたものだ。小皿一杯に少こし入れても三四兩だ。」蒲鉾でも、鳩の目の下の肉ばかりで三十羽もつぶしてこさへる。ケチナ蕎麥饅頭が、小豆や蕎麥粉に手をかけて、一つ何兩と云ふものだ。

◉八百善の亭主が、己にマグロのさしみを出したから、ケナシたら、講釋して聞かせた。ものさしで量ると、一分一厘、少しも違はぬ樣に皆な同じで、切つた角がシャンとたつて居た。ソンナ料理人は、江戸一、日本一と云ふものだつた。

◉鰻にしろ、出があつて、何處の鰻と云ふものがある。くろうとは夫をよく知つて、混りがあると、評するから、料理人の方でこわがつて、ひどく料理に骨を折つた。

◉今の客は、余計にさへして見せれは賞める。芋ツ堀だと、八百善の亭主が、よく言つたつけ。極粋な客は、珍らしい品と云つて賞めぬ。普通の品で、料理の善いのを賞めるそうな。

いが。金に引換れば、善いが、矢張り銀を選ぶので、同じよ

ヲヤアない乎。（廿五年九月三日）

◉今の人は、大相なとを言つても、實際に正金を扱ふのではないもの。正金は、もち扱かひ悪くてチ、ソレは仕方が無いよ。崇徳院の和尚が、二分金で二万兩ほど溜めたが、どふとも仕方がない。「どうしませう」と云ふ相談だから、『夫は、目黒の方にでも、別莊をおこしらへなさい。そして、少し宛、段々と送つて、地の中へでもお埋めなさい』と言ふと、そうしてチ、布團の中や、米櫃の中へ、少しづゝ入れて、段々に送つて、ナッショと二人でカメを買つて其中へ入れて、コウ云ふ樣の下にいけて、よふ〳〵助かつたよ。

◉もふ、二十兩も持つて居ると、カゴカキの肩にひゞくと云ふのサ。仕末にいけやしない。

◉爲替カエ。夫はズット昔しからあつたのサ。藩々の札は、コチラに、御用達があるものだから、そこで、幾らか割引して替た。大きな町人になれば、又二度び、その藩に行くときに用ひたのさ。アー、藩札は、こちらでは取らないよ。粗末なものサ。

◉藩札の高は一々屆けるのサ。屆は監察の方へ出す。高の調べは、勘定奉行の方で。一々調べるとになつて居たよ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◉十月後に物價が下ると言ふのかヱ。そう甘まく行けば、善いが。金に引換れば、善いが、矢張り銀を遣ふので、同じとジヤアない乎。(卅年九月三日)

◉あしたから、いよ〱金貨本位かヱ、夫で物が下るかい。此間、そう云ふ話しジヤアないか。物の價は、理窟の通りに行くものではない、勢によるものだから。夫に信用が減つて來ると、自然に札が殖える譯で、どうかくしても仕方が無い、物が上る。物が上るのではない、札が下るのサ。準備金を用意して置くと、そうではないよ。夫は、どうかくしても、いけないよ。金が減ると、自然と下るよ。ナニ、金貨の用意を仕たと言ふのかヱ。そうだと。ナニ大して換に來るものジヤアないよ。(卅年九月三十日)

◉伊勢の白子の邊は、金持がそろつて、居つたものだが、皆ソンナ潰れて仕舞つただろふ。行つて見ると、家には二三人の下男下女が居る丈で、シーンと靜まつて居る。夫に、大きな家だ。どふするのかと思ふと、年に一度や二度は仲間の集會もあるものだから、入るのサ。商賣は、皆ソンナ東京で仕たものサ。斯ふ云ふものがれ潰ると、ソレハひどいものだよ。お大名よりもひどひよ。御一新の比には、ソンナ仲間に餘計いぢめられたよ。皆んな、お大名に御用達をして居つたろふ。雲州丈へでも三十万圓と貸して、其上に七十人扶持位づゝを貰つて居たものが、瓦解となつて、何も無くなる。其後、公債が出ても、ホンノ紙きれと思つて、古證文同樣の反古と思つて居るものだから、ミンナ番頭などに取られて仕舞つた。『アナタ方の家には、公債が餘計あるでせう』と言ふと、「イーエ、あれは番頭がくれろと申しましたから、遣はし升た」と言ふのサ。實に可哀想なものだよ。

◉仲間などは、博奕が好きなものだつた。バクチを許せば、給料は入らぬと言つて來たほどだ。旅などしても、仲間折助が宿屋をゆすつて困るが、バクチを許してやると、少しもソンナ事は爲ない。商人などを引込んで、取つて仕舞ふのだ。ワシは、始終ともには、バクチを公許してやつた。

◉博奕は、徳川では、ひどい嚴禁で、家が断絶するほどだつた。夫でも、旗本などは、實に上手だつた。ワシの家のぐるりなどは、皆なバクチばかりして居たが、親仁が嫌ひだつたせいか、ワシは若い時から極く嫌ひだつた。從弟に、大へん

上手なものがあつたが、其くせ人が善いのだ。實に變なものだよ。

◉大きな茶屋などが、どふして成立つものか、チレには實に分らん。然し、よく聞くと、花だそうだよ。

◉船やどの亭主などは、實に上手だつた。

○船宿の亭主は、金もちでした乎。

◉金は無い、ホンノはでなものだつた。夫に、お役を言ひつかるものだ。

○警察です乎。

◉マア、警察の樣なものだ、今の水上警察サ。

○札さしはどふでした。

◉之は、金があるが、家數に限りがあつたからナ。之も、お役を言ひつかつた。

◉先づ、江戸で舊い家は小田原屋だ。二代目は知らない。德川さまよりも舊いと、よくさう言つたよ。徂徠が田沼の用を聞て居る時に行つて書いたもの、大石が書いたもの抔があつた。大石が、お出になると、女などにふざけて、つまらない御家老だと思つて、書いたものもむだに升たが、一枚丈け殘つて居ます、惜しいことを爲ました」と、そう言つたよ。

◉池上も舊るいし。熊谷邊には、應仁の亂の時に、逃げて來て、歸農したものが多くあるそうな。

罸を熱海の さまよひ日記（其四）

惡魔の子　有美

輕やかなる砲荷ひて、近郊に逍遙ひ出づる若人さへ、何かの獲物提げて歸るものを、態々バイロン、ウエルテル美術書などいふ擾ましきもの携へて、いがめしき法師姿にはる〴〵旅立ち來りし我れ、如何に惡魔の子なればとて、何の得るところもなく、オメ〳〵と三十近き面さげて『これでも詩人で候』と歸ることも適はねば、せめては、往復七十錢づゝの旅費と日々四十五錢の旅籠料にふさはしきたけの獲物になりともありつきて、此の費え償はでは止まずと、心も心ならず、或ひは、雨の小露に海岸あさりて、其所此處にうろつきなぞし、詩神の御告にでも預らばやと思へど、仲々にさる景はひさへ見えず。停車場は箱根路たどる客共の、あまた下り乘りする所な

れば、數おほき人の姿ながむるうちには、何か新らしき發明もやあらんと、百度參りとまでは行かずとも、日に二三度は至り觀れど、さる難有きことのなくて、たゞ備へつけある新聞紙ひるがへして、おも／＼しげに歸るのみ。さてはと、よしなき僥倖待ち望みて、晨早く街路のほとりに萬金の拾物せんと尋ね廻るてふ白痴の如く、鵜の眼、鷹の眼、はては、血まなこ盃まなこなどいふ怪しき眼つき光らして、國府津の町中、四方八方に睨め廻はれど、あゝ遂に何の得るところだになし。こは、まだ乳臭き我れの、生意氣にも何の目的なきに、漫遊などゝ洒れこみたるを、天の神樣の罰し給ふて懲しめらるゝにやと思へば、そゞろに恐ろしく、惡魔の子に似氣なき信心の念高まりしぞ、いと／＼殊勝なれ。『殊勝』とは、神の賞め給ふ御言葉ならんめれど、我が心は役なきことにいらぬ金遣ひしてけりよと、苦しみ悔むのみ。我れ是れまで幾度か父なる人の、金離れ穢きにつぶやき怒れることもありしが、今にして思へば、蛙の子は何處までもおたま杓子にて、我れも仲々のけちんぼなりけらし。

國府津とは、人も知る如く、箱根熱海に至る關門にて、往き來ふ旅人の多きところなれど、流石は都離れたる田舍なり。

或る日のこと、さる床屋の門にいたりて、曾て髯剃らせんと待ち居る間に讀み始めたる『萬朝』の續きもの、けふも又讀ませ給ひてよと乞へば、容易きことに悅びて、我れを店のうちに呼び入れ、その讀み終りて去らんとする頃には、今お甘薯にて茶を煮るところなれば、是非に亨けゆき給へよなど薦む。目的なき旅行は無意味なるものなりなぞ、悶え苦しむうちにも、かゝるやさ／＼しさのみは、うれしく思へど、國府津にては、到底四十五錢の旅籠料を償ふに足るべき獲物なきこと明かなれば、明日は晴雨に論なく、この所を去りて、小田原湯元熱海のあたりに、さまよひ出んものと決しつ。されど、茲に六ケしき一問題こそあれ。そは外ならず、我が國家と等しく、經濟問題にぞある。

東京を出る時、懷にせしは、岩谷天狗の句調ならねど、たッた五圓なり。こは我が事更らの慰みよりといへば、事おほ業に聞ゆめれど、其實融通の都合惡きまゝに、この行を凡て十日と見積り七圓を費す心算にて、もしも歸途の費用を食ひ込みもせばやと、二圓たけは之を京に殘して、その餘りのみを

持ち來れるにこそよれ。さるほどに、此の五圓さへ、彼れ是れ横濱近界にて費し終りたれば、國府津に着ける頃には、はや三圓半がほどに減じ、今は又この所をも去らんものと『富士見屋』の拂へ濟ませば、殘るは僅かに一圓三拾七錢一厘のみとはなれり。これにて、再び國府津に歸り廻ぐるまでの三日の旅を支へんとするとこの悪魔の子にも、可なりの哀れならずや。

國府津より小田原までは、馬車鐵道の敷かれて、車は元氣よく走り居れど、所持金僅に壹圓三拾七錢一厘なる貧しき身は素よりこれを乗り試さんの勇氣さへ出でず。さればとて、その乗車賃又僅に十二錢と聞かば、讀者は、尙ほ更らの憐れを我がために寄せ給ふべし。この間徒歩にて進めば、そのあたりの百性家漁夫の家など、殆んど軒並に、ハンケチの縁縫する娘子たち、數多に集り居て、物珍らしげに、我が近眼鏡の法師姿を見上ぐるも、興あることに覺えつ、小田原に入れるは、まだ四日の朝まだき漸く九時の頃なりければ、湯元まで行きて又この所に引き返へし泊らばやと、そのまゝ通り過ぎて、馬車鐵道に沿ひながら、かの所さして行けば、十一時ならぬに早や着きしが、聞けば、かの名ある箱根の塔之澤

といふも、これよりたゞ四五町奥とのみ告ぐるまゝに、その所まで尋ね見んものと、又心變へつ。前の日、鎌倉にて東海居士と話しける時、得意の口調に『塔之澤とは……それ……仲々、卿たちの種になる所だ』など、面白ろをかしく語られたることなど、今や思ひ出でられて、何か天女に似たる美はしき御姿にても拜するを得るにやと、稍々心待ちに步進ませしが、こは、全くの空賴みなりけり。たゞ來れるは、坂急ぎ下る郵便脚夫の、半天の襟に『宮之下郵便電信局』と白くぬき出せるにてありけり。之を見て、ふと物好む心は起れり。さても、我が雨を冒してもとの決心に、我が神悅れてか、今日は無類の日本晴なりしも、難有し。

もみぢの葉

西の一女史

○松林の閑居

松の雫を　いのちにて
きくの香を　くむ水の
かどの小川に　おとたえぬ
山下いほの　秋の夕ぐれ。

○わが理想の男子

(一)
我ますらをは　あめつちの
廣き稜威を　かしこみて
花のあした　月のよひ
聲のとかにも　たゝえうた
神にきこゆる　人もがな。

(二)
わがますらをは　アラビヤの
野みつをのみて　革のおび
義の冠に　愛のひも
しめて結びし　人もがな。

(三)
わがますらをは　富士の根の
空に聳えて　いや高く
遠き望を　旨として
白きみ雪の　心をもがな。

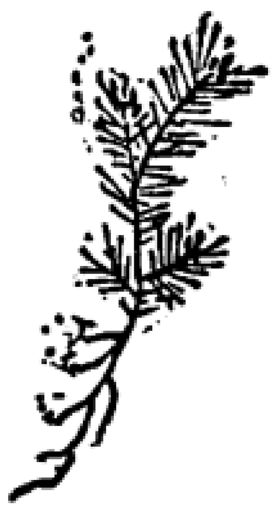
(四)
いつはり多き　世の中の
人事正邪を　見すまして
ちりもとゞめぬ　ますかゞみ
まどかに清き　心をもがな。

(五)
我ますらをは　岩が根の
涙にゆるがぬ　姿にて
青海原を　てらすよの
月の光の　心おもがな。

(六)
よしやくろ雲　おほおひて
しばし光は　かくるとも
いそ山まつの　千代かけて
變らぬ道を　ふむ人もがな。

○はせを

かぜ吹くあした　あめのよひ
心にかゝる　はせを葉の
夏すぎ　去りて秋もまた
ふかきをもいの　きのふけふ。



同人社

（三、四、五）

◉……御言の葉の慕はしさに、女學雜誌を相求め、友なき土地には唯一の至寶さ、發行の日を指をりまちて拜讀いたし、先生に接して萬の世のことはりを知り候を樂さ致候ひしに、かゝる雜誌は、むしろ男子こそ必要ならめ、女子には害ありて益少しとの評論かしましくして、遂には此月より御郵送を御斷り申候次第にて、かなしさつらき心中御察し被下度候。學びの家にありし日より座右はなさず拜讀せし雜誌の事さて、はらからに別るる思ひにて認め候、御斷りの端書御察したまはりたく候。かゝる社會よりの評論のため、或は一家内よりの苦情のため、我等女子が思はぬ制裁を受けて思をのべ、業を成すを妨たげらるる事、澤山に有之べくさ、つく〴〵相感じ申候。今よりは社會的に語らふ心の友なく、外はまた住なれぬ所柄さてもさより友なく、欝々さして一家内に閉息するの外無之身さ相成りはて候。心中御さつし玉はり度候（攝州）。

◉記者足下、樂むべき冬は來らんさして黑髮山上先づ錦を戴くの時、女學雜誌を拜讀して少からぬ歡喜を得申候。多くの婦人雜誌は、舊思想殊に攘夷思想などを開陳し、若くは女子さ小兒さ混同したる見解を以て編輯するの際、獨り女學雜誌のみ發達したる婦人を根據さして進歩思想を鼓吹せられ候は、小生の感謝に堪へざる所に御座候、幸に自愛せられよ（日光）。

◉嗚呼吾が女學雜誌、汝はそれ雜誌中の天女なるかな。春の花か、あらず。夏の雲か、あらず。秋の風か、あらず。冬の雪か、あらず。四季を通じて流るる淸き氣の姿なれや。愛の言語もて囁く如く、吾いはんさするものをいふものは汝なり。日に手にする數十の册子中、予の最も待ちまうくるものは爾也

（在若溪、隈川）。

大磯だより

十一月三日、晴　金曜日

湘一烟　女史

けふ程目出度日はなしとて、母君、衣を改めて祝し玉ふ。吾は忽ち昔を思ひ出して、只だ口に目出度といふのみにてはすまぬ祭日。十日も前より心配胸につかへ、過ちなく此日のすまんとのみ、こゝろにかゝりたるに、今は、日三竿の後、起るとも、ねまきのまゝに居らんとも居らば居れる今日、太平の恩澤は、この閑人に於てこそ知るれ。かくの如き閑人には、日曜日が百、一時にふり來るとも、大晦が千一時に飛び落るとも、とんと痛痒は感ぜざれど、この閑人も食せざれば飢ゆ衣せざれば凍ゆ、こゝらの食と衣とに從事する僕婢等は、心にひまあるとも身にひまなく、この祭日を祝する爲におもふがまゝ遊びくらせよと、前日より休息を與へ置きたれば、皆な喜色滿面なれど、一夜の中に乾葉は庭に翻へり、塵埃は板間を汚がす、掃はざるべからず、拭はざるべからず、朝食作ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ざるべからず、午飯支度爲ざるべからず。事多くして晷短かく手足伸さん暇もなく、僕婢の境遇も亦憐れなるかな。十三の童は學校の式に臨まんとて新らしき袴着けていとうれしげなり。京都にては、饅頭の御馳走あれど、この學校には何もなしとの事なればと、本意なき顔付なるもおかし。吾もうへのみ手近かにあるきぬと改め。少しく前庭を運動して見る心はなきか、餘り讀書三昧もあしかりなんと、母君の誘ひ玉ふに、吾も試みん氣になり、相携へて先づ今を盛りなる、宇宙、世界、清少納言など呼ぶ薔薇花の籬邊を歩して、平素の疎遠を謝したり。傘なくては出られぬ天氣、頭を拂ふ風も寒からじ、家に座して案じる程にてもあらずと、小柴垣より玄關前の門に出れば、旭日旗輕く飜れり。わが門ながらわが眼には珍らしく、大きからぬ旗を不恰好に長き竿にかけたれば竹のさきに鈴といはまき有樣、いかになれぬとはいへと思ひたれど、小言いはぬが花と其まゝ通りぬけ、路傍の菜圃を見つゝ外の門を出で、汽車線路を渡りて舊東海道に達せし時は、既に數里を歩するの思あり、杖に倚りて吾が家を顧見れば、書窻日夕相對する山、秋色正に闌はなり。山は少しく隔たつて、却て親しき心地す。山の紅なる邊、白雲の浮動する有樣、實に天地爽絶快絶、吾是に於て黙する能はず、歌て曰く、

雨晴秋色遍林間　萬樹霜楓對碧灣　門外指望雲一角
吾窓旦暮相知山

秋晴偏好歩林間　禽共去兮雲共還　退日欲人知我住
仰看紅葉最多山

時に梵鐘の幽かに響き渡るに、其幽致更に禁え難ければ、口に出るがまゝに、

踏破晴沙去出門　日和風似晩春温　不知山寺在何處
鐘度白雲紅葉村

など〻吟じて、東海古驛を挾む松根に踞して、ゆきこふ人をながむ。明けても暮ても一室にのみ坐臥して人間は家のおさんと權助、他は白と呼び茶と呼ぶ二ひきの犬を見る位が常なれば、婆さんの鼻すゝる貌も、子供の泣く樣も、車をひく男も、籠荷ふ女も、豆腐屋も、青物屋も、桶やも、やきつぎやも、竹の皮も、土瓶のわれも、大根の葉も、きれくずも、かみくずも、吾には勸工場とおもへば、おもはれるなり。かくするうち、學校よりの歸路と見え、幼男幼女幾むれとなく來

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る。衣服の奇麗なるにはあらざれど、むさくろしき人のみ多く通行する道路なれば、枯林時ならず幾種の花を現はせし觀あり。先第一に來りしは、十二三の三人組、いづれも小倉袴に木綿のつゝ袖、これ當今學生一般の流行なり。この三人組無邪氣に何か語りつゝ來りしが、吾等の居るに心付きしや、急に威儀を整へ、其怜悧を示さんとの心かけ現はれたり。この掛念は小學〻齡より棺に入らん其日迄持續せらるゝものなるかな。これに續て五人七人に組を爲して來るは、各同級ならんと思ひたるが、女生を見るに、其衣帯の輕重によりて隊を爲すを以て見れば、平素其家の貧富によりて交はりを異にするにあらずやを疑ふ。着物は多く双子木綿なるものなれど其袖を長くし帶をやの字にし、髪を垂れて色絹にて結ぶ、全くの百姓娘には見えざりし。こはこれこの地、都人士別莊の流行より知らず識らず其風俗に化せられんとするによるか。されど、そは猶いもの葉を以て蓮の葉に思はしめんとするに異ならず。されど、これらのいもの葉も、地球は如何なるもの、電氣はかくの如きもの、なにはかにして、かはなになりと、昔し、子の曰く先生が夢にも考へざりしことを尋常茶飯で悟るやうになりしとは、文明の恩澤、實に驚ろき入るの外なく、この文明の玉子が、學校の先生をその家のやとひ小僧と同一視して師弟の甘味を感ぜぬ餘毒が、遂に浮薄の風潮を社會に波及する原因とならんと考へては、容易ならぬ玉子なりなど、夫より夫に思を馳せて、際限もなきに、踵を回さんとて身を轉ずれば、急に疲れを覺へて、足すゝまず。家がこゝまで迎に來るものなればと、手の達かん程の家をうらましげに望みたり。あゆめぬまゝに、また佇立みて回顧すれば、耕作に餘念なき百姓等は、祭日が來ても去ても、山が既に秋たるも、水が將に冬たらんとするも何の頓着もなく、只麥が麥にして、米が米たるのみ。

挾路長松古驛關　漁帆懸在夕陽灣　野翁全慣秋光好
頭上不望紅葉山

柧をかばよしや人こそ訪はずとも、
秋はにしきを織出すらん。……海舟

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

随感

○何をか一大事とする

何をか一大事となす。卑怯にして騒々しき宗盛の一大事より、忠烈にして重厚なる重盛の一大事に至るまで、其の品、何んか限りあらん。左れど、わが言ふ所ろは之と異なる。一大事は乃ち人間其の迷よひを去るを言ふ、而して迷ひの大なるもの、生死の羈絆に彷徨ふより大なるは無し。生死果して迷ひなる乎、迷ひならざる乎、其の是否を論定せんとするに忙がわしき、先づ迷ひの初めなり。われは言ふ、多疑執惑にして一信なく、浮薄輕淺にして決定なく、眼前一瞑を隔つるの故に放浪として酔ひ、忽まち無常に際會して蒼顔落心するの人に對し何んぞ迷ふことの久しきやと告ぐ。生死は是れ一大疑問、人心先決を要するの一大事なり。此の事未だ決せざれば、人生極めて狹まし、到る所ろ屢ば驚絕せん。此の事未だ徹せざれば、人事太はだ薄し、忽まちにして淺底に觸れん。看よ、人間の壽長くして六十、其の七十路に達くは、むしろ稀なり。三寸の氣息絕ゆるに早く、生死の差別、刹那にあり。夜半の風、旦たの落花、意はざるに人の無常を見めし、人反つて念とせず。幾度か驚ろかされて又幾度か忘れ、畢生遂に大悟の機なし。大悟せざる亦或ひは可なり、只だ大喜せざる寧ろ可憐にあらずや。嗚呼、生死の疑惑を透過せざる者、深山に迷ふが如し。白霧足下より起り、黒雲頭上より下る、未だ曾て青天白日を見ず。何んぞ憂悶の層なるとや。

○未だ公心あらざる時

未だ公心あらざるもの、何を提さけて公事に任ぜんとはするや。未だ私心の去らざるもの、何を憤ふりて私事を更ためんとはするや。余は深く惑ふ、今の濟々たる多士、それ何の賴む所ありて、若く奔走周旋するかと。天下は公器、蒼生は天の子なり、單だ死せる學理と、枯れたる典例とをもて、之が活ける需要に應ずるとは難し。夫れ今の才子の素養知るべきのみ。未だ曾て自から信ずるとあらず、何人に信ぜられんとする乎。寡婦は其の三歳の子をすら托せず、天下安くんぞ其

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の公器を托せんや。事の成否は、先づ自己に聞き乃ち明了せり。然るを何んぞ暴りに騒動して虚日なきや。億兆の南北に狂奔するに拘はらず、地球は東西に廻轉せり。才子の幾度か絶叫絶倒するに拘はらず、國家は徐ろに進轉せり。嗚呼、騒がしき才子、忙がはしき事業家よ。單に白痴院の白痴をのみ笑ふなかれ。

○相ひ思ふ相ひ信ず

相思ふものは、如何なる隔てありとも能く相慕ふ。相信するものは、如何なる妨けありとも固く相信ず。わが心の動かざるによりて友の動かざるを察し、わが心の賴母しきによりて、友の情けを推す。風波いかに荒らく、人心何ほどつれなしとも、相思相信の人をいかにせんや。天地もし崩るゝとも、固き此の誠實を根柢として世は再たび築かれん。人生たとひ無常に無常を重ぬとも、此の聖愛の渝るなきによつて人に永生あらん。愚かなる輩よ、われ等何んぞ言語を要せん、心中遠く響くものあり、歡喜、悲憂一々に相應ぜば、同情交思のたより、天涯地角、直ちに相結ふにあらずや。

寄書

袖の涙

白百合

（一）
などてか君はかくばかり　こゝろ優しくいますらむ
なごてか君はつれなくも　なしまさぬらむいと優しき
君かこゝろのふかきほさ　我くるしみもまさるなれ

（二）
もしも優しきみこゝろの　わか身の上にあらずして
つれなく我になしまさば　夜々のまくらは斯ばかり
ぬれざらましを我そでの　絞ろこさだになきものを

（三）
つれなき心の世にあらで　やさしき心のあれかしさ
いのるは人のつれなるに　なさて我のみやさしかる
こゝろを厭ひつれなかる　こゝろを望みもさむらむ

（四）
われも現世のひさなれば　やさしき心を身にもさめ
つれなき心はいたふなれ　しかはあれざもたゝ君の
やさしき心のなかれかし　つれなく我にしてよかし

（五）
しかはあれども君はしも　まこさ優しくなしまさで
つれなく我になしまさば　あゝその時よわかそでは
ぬれさるべきかさては又　夜々のまくらは乾くかも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

晩翠の開書

文界斗筲の小人　有美

土井晩翠子は、我が曾て『晩翠のから評判』と題して記載せる一項を近刊の『新小說』に見、十月廿日の『讀賣』紙上に於て、當該雜誌主宰なる後藤宙外子に一開書を與へ、うちに我がいへるところのものを以て、全然の讒誣虛搆に非ずんば、邪猜なりといへり。こゝは事實問題にかゝる。故に若し、果して其事なかりしさせば、我が邪猜なりしこと勿論なるべし。されど、その讒誣虛搆に非るや又明かなり。是處に至りて、我れは必ずしも、罪を謝するに吝なるものに非ず。然りと雖ども敢て言はん。人の子を目して『邪猜の筆を弄して自ら得々たる文界斗筲の小人』なりといひ、之れと『言を交ゆるは不肖の猶自ら恥るところ』なりといふ如きは、謙辭を並ぶるに巧みなる晩翠子のために、深く取らざるところなり。少しく胸わるき冷罵を被らしめられたりとて、直に『小人』よばゝりする如きは、自ら小人たるの譏を免れず。また晩翠子は恰も詩人たる橢能なきものゝ如く、巧に謙辭を列ねらるると雖ども、我が曾て子が言なりとして、さる確かなる筋より聽けるところは、全く之れに反す。加ふるに、子と高林學士との間、素より我が取りて以て立證の材となるべきほどの依賴狀の授受あらざるべきも、少なくとも兩者の間、一種の默契ありしといふは、必ずしも、惡る推諒のみにあらざるに於ておや。是れ我をして所謂『邪猜』を逞ふせしめし所因なり。また、我れとて人の數にあるもの、名なしの權兵衞にもあらぬに、事更ら呼ぶに『女學雜誌記者某氏』の『某』を以てせるなど、晩翠子が心事の、卑陋賤劣なるを明示して餘りあり。我れは今之を細說せずと雖ども、之れ又『文界斗筲の小人と言を交ゆるを恥』づる子の高德のために、深く惜む所なり。我が晩翠子の詩に片腹痛く思へるは、一朝一夕のことに非ず、委細は或せて本年四月廿五日發兌本誌第四百八十六號『藤村子の詩』を評するかうちにあり。

終りに言はん。かく『文界斗筲の小人』と言を交ゆるを恥ぢ給ふほどの新詩人晩翠子（文學士）のために『公平忠實なる文壇一方の批評家』と讃めあげられし『宙外君足下』こそ、無類の果報ものなれと。

○明治音樂會のために

同

明治音樂會は、西樂篤志家の團躰なり。その顧問ハウス氏の如き、全く之れが指導のために其老躰を勞して、遂に激しき病ひに罹れるほどなりとぞ聞く。會員また總て熱實、この種の會合中、多く其比を見るべからず。過ぐる日、夏期休會後の初會を上野奏樂堂に開く。而して集るもの誠に少なし。我れ是れに列聽して、眼殆んど淚あり。明治音樂會遂に亡びなんかと。世の樂を愛する儕輩よ、これを爾の耳のためと言はず、たゞ我が樂道興隆のために、其顧問其會員の熱誠のために、暫しの時と少しの資とを割ひて、必ず明治音樂會の演奏に聽參せよ。プログラムの斬新ならざると變化少なきとの如きは、暫く問ふをやめて可なり。況んや舊きものを度々聽くは、耳の修練のため頗る利益多きに於てをや。此の度の演奏中、新作の尺八曲なりといふ『波の音』は、我れ聽て其意を享け難く、管樂に大村氏去りてよりフリユートの勢ひ至らざるところあるを覺えしめ、櫛田氏が箏曲に伴れたる歌唱は、仲々に其聲高く美はしく、この仲間にての珍なるべし。

○白馬會と繪畫共進會

同

今年は、美術のあたりどしにあらざるにや、二つながら碌な出品ありとも覺えず。されど、繪畫共進會にはたゞ目新らしき趣向のものあるだけ、稍々退歩の色ある白馬會の陳列ものには、勝さりたらんか。横山大觀の夏日四題など、やたらに西洋アンプレシヨニズムの筆法にかぶれて、お隣りの白馬會と戶間違ひせるに非ずやと思はるゝもをかしく、小堀鞆音氏の、何に感じけん今度よりは、例の土佐派のオルソドックス壞して、そろ〱怪げなる繪具使ひ出せしこそ、仲々に遺憾なれ。要するに美術院一派の畫は、詩文集の表紙畫挿畫などにはよけれ、美術の大舞臺には未だし〱。白馬會にての白眉は、この春も紹介したる三宅克巳氏が水彩畫なるべし。この春のものよりは、稍々神韻を欠くの憾みありと雖ども、一層の巧みを顯はせり。磯野吉雄氏の油繪可なりに面白く、北蓮瀧氏の繪具の仕ひ方、ひねくれたる割りに活動を欠き、白瀧氏の『蓄音器』は、その題目こそ異れ、

昨年出せる『稽古』と、圖取りの具合といひ、色の配合といひ、全く其趣きを一にし、作者の人格も大低はこの二枚にて推察し得らるゝほどなり。しかも、その二枚とも巴里送りとは、鑑査官といふものゝ御器量も、大低は量られぬべし。我れは、ともにパノラマ畫的なりといはん。

○豐竹呂昇

桃花

天下には素より馬鹿氣たると多し。呂昇の人氣の如きは其最たるものか。夫れ無花果の芽ぐむを見て夏の近きを知るを得ば、乞ふ去て呂昇の義太夫を聽け、容易に輿論政治の賴み少きを學ばん。『女越路と云はるゝ呂昇の上京』とは、數月以前より、紙より眼、口より耳に嘖々喧傳して、滿都好傳家の血を沸かさしめたり。十月一日、遂に渠の招牌は高く席亭『若竹』に揭げらる。我が好奇の意馬、何ぞ人の背後に落ちん。其第一日に往いて之を聽く。時は未だ晡れて間もなきに、木戸口の混雜や實に喧嘩の如く、動搖き渡る塲の人波、流石に濶き席塲も倏忽の間に立錐の地を剩さず。成程凄じき人氣なり。然れども畢竟人氣のみ、唯人氣のみ。呂昇、知らず如何の義太夫をか語る。我は世の所謂『通』に非ず、また『通』たらんとを願はず、我は唯た一種の趣味を持て好んで義太夫を聽くもの、故に茲に呂昇を記すは呂昇の藝評に非ず、之を聞いて感ずるまゝを記したるのみ。呂昇の義太夫は女越路なるか。越路は果して大坂の名人なるか。我が味ひたる呂昇の義太夫は、實にアニリン酒（註曰衞生試驗所の所謂贋造葡萄酒）の如し。色は美しきも醇ならざれば、跡の心地は云樣もなく惡し。これ關東のヘゲタレなる我れに、大坂の名人を解するの能力なきが爲なるべし。嗚呼我が耳は呂昇の語るものを義太夫として聽く程に發達し居らざる乎。我が知る義太夫の生命とする所は『情』の活動にあり。恍惚として聽者を其境其時にあらしむるにあるなるに、渠のは然らず。『さわり』の諸唱と身振（語るよりも見せる）、これ即ち全幅にして寧ろ生命なるものゝ如し。されば聽了瞑目、白粉を糊塗せる一女性の高座に躍るの外、何等の印象を得ざるは素より其所にして、涙なぞ義理にも溢す譯に行かざるもまた素より當然也。我曾て愛之助に就て同樣の言を爲せり。或人之を酷とし斯の如きは女義太夫の本色なりと云ふ。斯る人は我儕と根底の見解を異にす。我儕には義太夫あるのみ。豈特に女義太夫なるものあらんや。我儕は演者の男なると女なるとを問はず、唯た義太夫を語るものゝ義太夫を聽かんとをのみ希ふ。我れ緣薄くして未だ名人越路太夫を聽かず。されど呂昇を以て『女越路』と稱し得べくんば越路なるものまた知るべきのみ。茲に於て我れ焉ぞ古今の名人我が綾瀨大先生の自重を乞はざるを得んや。

頃日斯道の老大家に會して談呂昇に及ぶ。『陽氣な義太夫ですな、あアいふのが當世かも知れません』と。蓋し渠を盡せるの言か、呂昇の如きがいゝ人氣は、眞藝人の耻づる所、そは藝は聽くものなるに渠に集るものは見んとするものなればなり、何となく集るものなればなり。呂昇たるもの若し眞に藝道の爲に犧牲獻身の心懸けあらば、今や麻を着、灰を蒙り、退て苦學將に咽喉を破るべきの秋なり。然れども我は此事を以て偏に呂昇を責むるの酷なるを知る、唯だ此の如き藝人を歡迎して、眞底より『旨い』と嘆服するが如きは、確かに江戸人の屈辱なりと慨す、我れは斯る人を若竹に見たり。惟ふに大都の田舍人たる『若竹』の客の外に、斯る木耳的聽感を持てるもの、恐らくはこれなかるべし。アゝ情けなくも亦憫むべき哉。聞く呂昇の上京するや、顏を出し手拭を配る所、無量四百餘軒に及ぶと。今の世は愛嬌の世、俗才の世なり。渠の人氣の偶然ならざるを知るべし。渠は畢竟一個の俗才子のみ。義太夫を聽かんと欲せば、我が東京、綾瀨太夫あり、小清あり素行あり、何を苦んで數千金のアニリン義太夫を聽かんとするか咄。（狂艃門）

片々

⦿故透谷子未亡人　北村透谷子未亡人みな子は、其後堅節只管遺命を守りて傳道に從事せられつゝありしが、今夏米國に遊び、今はインデヤナ州シロムに近き、「クリスチアン、ユニチン」大學に在學せらる。近信に云く、三千里外の客、故鄕を思ふて露ふかき夕はそゞろに襟を濕し候。

◉各御息所　皇室の愈倍しに繁らせ玉ふこと最とも喜ばしき限りなるが扨今維新前後より我皇族御結婚の御關係を記し奉つれば概れ左の如しと承はりぬ

故有栖川大將殿下
故北白川宮殿下
小松大將宮殿下
伏見中將宮殿下
有栖川中將宮殿下
閑院中佐宮殿下
小松少佐宮殿下
山階大尉宮殿下
華頂大尉宮殿下
久邇中尉宮殿下（御豫定）
梨本中尉宮殿下（同）

溝口伯
島津公
有馬伯
有栖川宮殿下
前田伯
三條公
岩倉公
九條公
德川公
島津公
鍋島公

◉竹園の御家庭　石黑軍醫總督一日有栖川宮殿下に伺候す會々殿下御用務の御樣子なりしを以て、御遠慮申上げたるに、苦しからずとの台旨により、御前に進めば、豈圖らん、畏くも殿下は御手づから御軍袴の破綻を縫はせ玉へり。總監大に驚き恐れ、殿下には如何にして斯る御教育を受けさせ給ひしと拜問せしに、殿下顧み玉ひて、我大宮殿下は、家庭の御教訓極めて嚴におはしき。曾て訓へて宣はく、宮中に昇りては、或は侍者を伴ふこと能はざる御場所にも到ることあらん、かゝらん節、若し袴など物に觸れて破れたらんに、其儘にして御前に出づることを得ざらん、萬一の爲針の技も亦心得置ざるべからずと、故に此智識を得たりと宣へりと　京都府教育雜誌（第九十號）

◉婦人の人類學聽講　本年の帝國教育會夏期講習會に於ては人類學大意聽講の爲め出席せし婦人四五人ありしが此時の講師たりし坪井氏は其后篤志婦人の爲め每土曜日午后自宅に於て稍や精わしき講義を爲し居らるる由。其題目は「世界諸種族の現狀」なりと云ふ、遠からずして日本のバックランド孃を見るに至らん歟（東京人類學會報告）

◉女學生の繩飛　華族女學校にては、從來學生の中に繩飛の遊技を爲すもの多かりしが、嘗て　皇后陛下の同校へ行啓の砌この由を聞召れ、特に生徒中より選出して此技を演ぜしめ御覽ぜ玉ひしとあり。夫よりして此遊技の生徒中に一層の流行を來し、此頃にては市中の他の女學校にてもまた此技を演ずるもの多しと云ふ（躰育）

◉英國の看護婦　下田歌子英國にありて病めり、宿の令孃直ちに看護婦となりて懇切至らざるなし。女史過日追慕の情を演述して曰く、家に殘れる一人の老父の事の心に懸らざるにあらざるも、日本に歸りて后は到底斯の如き看護を受ること能はじと思へば、此儘異域の鬼となるも遺憾なしと迄覺りたりき。予の如きは、夫もなく子もなく近親もなく、終には他人の看護によりて死せざるを得ざることなるが、殘念ながら日本にては迚も此の如き看護を得ることを能はずと感じたりしなりと（赤十字）

◉有美君と齋藤綠雨氏　新小說の評論記者曰く、婦人及び戀愛に關して頗る奇聳なる觀察を大膽に吐露して憚る所なぎもの現今の文壇に二人あり。一は世人の能く知れる齋藤綠雨氏にして、他は『女學雜誌』記者脊柳有美氏とす。二氏は一面に於て頗る似たる所あることもに他の一側に於ては霄壤も啻ならぬ相違の點を有す若し深く二氏を知るものありて相對比して人物論をものしなば極めて趣味あらんかと思ふ。綠雨氏は胸底に堅實なる常識の基礎を有して而も破格の大奇論を吐て世を驚かす。故に議論の本意は往々言外に潛み氏に反抗して立つ多數の駁擊者は概れ影を搏つて其の實を捉へ得ざるに終るを定例とす。有美氏が論を行るの樣は之に全く正反對にして極めて露骨に極めて直截なり。されは其の文も前者は云ひまはし巧みにして偶織穠綺麗の弊に陷ることあり、而も鋭利にして他の灸所に毒箭を射込の技倆多く匹儔を見ず。後者は往々警句ありけれ共文は稍粗笨にして冗漫の病あり、而も其の自信と熱血とを以て所思を忌憚なく披瀝するが故に、讀む者をして同情を惹起さしむるの力や强大なる者あり。綠雨氏の文は讀者の眼中に文の消ゆることなし、有美氏の方は屢々讀者の眼中より文消えて、唯熱罵の聲又は嗚咽を聞かしむることあり。故に文を以て論すれば綠雨氏が精練の筆は有美氏の到底敵し得べきにあらず。其の說に到りては一長一短俄かに軒輊し難し。有美氏が「女學雜誌」第四百九拾四號に揭げたると「惡魔の結婚觀」の如き若し綠雨氏が筆にしてあらは文壇に幾波瀾の種ともなるべかりしをと憾まるゝ也。

◉夢醉獨言　勝海舟先生の父夢醉先生獨言は、寫本にて世に一册しかなきものなるが、此度び「舊幕府」雜誌にて揭載し初めたり。其初に云く、息子（海舟先生の事）がしつまい故益友を友として惡友につき合ず武藝に遊んでいて已には孝心に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

してくれてよく兄弟をも憐みけんそにして物を遣はず麁服をもはぢす麁食しおれがこまらぬよふにしてくれ娘が家內中の世話をしてくれてなにもおれ夫婦が少しも苦勞のないよふにするから今は誠の樂隱居になつたおれのやふな小供の出來たらばながく此樂はできまいと思ふ是れふしぎだ神佛には捨られぬ身と思ふ孫や其子はよく〳〵義邦の通りにして子々孫々のさかえるよふに心がけるがいゝぜ。

⦿米國の女子大學　米國には女子專門の大學十四校、大學百四十三校あり。前なるは、生徒總計四千四百十一人、卒業生七百〇九人、其女教師三百十三人なり。後なるは、生徒總計一万九千五百三十四人、卒業生千百十二人、其女教師千五百十人。又同國の大學は、十中七八、皆な男女同學なり。

⦿米國の婦人崇拜　丹羽淸次郎氏、米國漫遊一斑を述て曰く、米國社會は他國に於て見る能はざる奇異の狀態を示し居れは、一見混沌たる無秩序の社會を想像する者もあらんが、兎に角、美しき秩序に包まれて制裁の澀き寧ろ羨むべき者少からず。其原因は如何と云ふに、婦人崇拜と公私の區別明らかなるの致す所多きが如し。（新世紀）

⦿田中正造氏の歌　小理窟はかたが張るからよしの山すてゝこんにやくで土手でぶらつけ〇世をいさいそしりをいみて何かせん身をすててこそ樂しかりける〇泥人の首にかけたる頭陀袋のちには天下握りめしいれ（救濟新報）

時報

⦿九條節子姬　姬の御淑德おい〳〵と世に聞こゆ、邦人皆な手にかざして祝ひまつるぞ、めでたき。

⦿愛姬縣の女學　愛姬は其文字に於て既に女學熱心にてあるべき筈なれど、實際反つて然らず、但だ松山に二個の女學校あるのみ。今治は元と橫井時雄氏傳道し、基督教一時隆盛なりし爲め、女生にして出でて神戶に學ぶもの多く、存外多少の高等女學生ありしが、中ごろ反動の爲め其途絕たり。然るに本年の臨時縣會は、現在松山の私立愛姬高等女學校を縣立にし、宇和島今治の兩町立女學校に對して引續き補助を與へ代用校にせんとの原案を出せしに、喧しき議論の末、左の如く決したり。左れど、理事者は之を採用せず、來年度に於て是非原案を貫徹せんと欲すると云へり。其決議は、

一　高等女學校の數は三校とす。

一　高等女學校の位置は、松山市、宇和島町、今治町とす。

一　三高等女學校は、明治卅五年度より高等女學校令第五條を適用するものとす。

但し松山市に於ては代用に足るべき女學校の設立を待て本條を適用す。

一　既設に係る高等女學校に對しては、代用學校となす迄明治三十一年縣會第十一號補助規定により補助金の交付を持續するものとす。

因に云ふ。松山市會に於ては、曩に私立愛姬高等女學校の負債三百餘圓を辨償して來年度より市立高等女學校に引直すの決議をなせしが、此頃更に來年度より當市に縣立高等女學校設立を希望し、敷地代六千圓寄附の儀を決せり。要するに該縣下にも女學の迸燃立んとするに至りしは、賀すべきと也。

⦿熊本佛教女學校　熊本縣眞宗本派有志者去月三十日同市忘吾會社に僧俗混同同志會を開き、會する者百五十餘名、金三万圓を募集し佛教私立高等女學校を設立するとに決定したりと。女子教育は耶蘇に先鞭せられづつあり、今此美を聞き、歎喜に堪へず（密嚴敎報）

結婚は犯罪を減少するや　中央公論（第十號）
俳優の閨門（月の舍まろか）　新小說
　市川團十郎の女房（四年十一卷）尾上菊五郎の女房（四年十二卷）
新日本の女子（西武雄）　新世紀（第三卷第二十一號）
家事衛生の發達を計るは女子の衛生思想を喚起せしむるにあり（齋藤桃坪）
　通俗衛生（第十五號）
女子の海國思想（肝付兼行）　教育公報（二二八號）
烈婦問答きれ子　日本人（第百一號）
女子躰操時間增加の議（小林氏）美人と躰格（渡邊）　信濃教育雜誌
羽子とテニス女帶とコーセットの比較　躰育（第七十二號）
夫人の素顏（奥原晴湖）　報知新聞（連載）
大名の奥向（御守殿）　讀賣新聞（連載）
御殿女中（中老お八重の事）　千代田日報（連載）

エフ、エチ、バーネット女史著

小公子

LITTLE LORD FAUNTLEROY
BY MRS. F. H. BURNETT.

上製美本石版術譜十數葉入全一冊定價金一圓廿五錢郵税十錢並製クロース表紙美本定價金七十五錢郵税八錢

「バーネット」女史の筆は、流快にして眞に迫るを以て、其名泰西に鳴る、本書も亦女史の筆に成り、字々句々一として快ならざるはなく、穎悟なる小公子が、天眞爛熳にして無邪氣なる所作を、寫し得て極めて妙なり、英文學研究に最も適切なるの書なれば、師範學校、中學校、女學校等の教科書として最適當の良書なり、

發行所
東京神田區雉子町卅二番地 岡崎屋
東京神田區表神保町二番地 中西屋

耳科分院新設廣告

ドクトル 小此木信六郎

耳科分院 日本橋區住吉町三番地へッつゐがし
診察 午後一時より

小此木耳科院本院
本郷元町水道橋外
本院診察 午前八時より

第九回 耳科學講習會

山室軍平著

平民之福音

定價金二拾錢
郵税金四錢

●●●●●（毎日新聞評）本書は信仰燃ゆるが如き著者が救世軍士官として、多年の間働ける經驗と、沈思の餘に成れるものにして、極めて熱心に、極めて眞面目に、而も其平易簡明にして、譬話に巧なるは、恰かも鳩翁道話の如くに基督の教を説けり。余は此書を讀みて神の力の、特別に著者の上にあることを感ぜずんばあらず

●●●●●（福音新報評）福音を何人にも分り易く説くは今日人々の難んずる所なり。山室氏は其天賦の才力と經驗とに由り、此難事に於て割合に成功せられたり。平民の福音を讀み行くに、基督教の鳩翁道話、道二道話とも言ふべきなるを覺ゆ。其收むる所直接に天父の事、罪惡の事、基督の救贖の事に關し、終りの方に信仰の生涯、職分の道と云ふ二章を加へ、基督教の要義と其力とを一通り説き示したり。平民に取りての神學書たり説教たりと言ふべし。

發行所 東京市芝區南佐久間町一 救世軍本營
賣捌所 東京市銀座四丁目 教文館
同 東京市京橋區采女町 警醒社

○…○ 女子のとも ○…○

毎月二回發行

定價一冊拾錢●六冊五拾七錢●十二冊壹圓拾錢●無郵税●郵券代用一割增

天長節發行第五拾四號重要目次

口繪寫眞版 野口小蘋女史筆菊の圖二頁大其他二枚
出版物の勢力を論じて家庭の注意に及ぶ 高瀨代次郎
挿花 近藤嘉三
料理法 女子高等師範學校講師 増田順子
刺繡 女子職業學校講師 金山つね子
造花 仝 堀口千代子
持統天皇 松野栗堂
星の話 かはかみ
古今名作評釋 戯庵主人
落葉のはきよせ 李迺舍主人
蟲のこえ すがのや
浦つたひ 華族女學校學監 下田歌子
常宮周宮の御兩所を日光なる離宮に伺ひ奉りし時 小川直子
千代の雫（一名菊のはなし） 松本浩別

◉大附錄（三十餘頁）◉
◉懸賞募集廣告あり◉

發行所 東京神田鎌倉町二番地 東洋社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY